
aiolos

エンノイア

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

aiolos

【Nコード】

N9070V

【作者名】

エンノイア

【あらすじ】

離婚した母親と暮らす、ごく普通の少年エンノイアは、ある日、母親の恋人との葛藤から、家を飛び出す。街を走り抜け、川原にたどりついたエンノイアの耳に聞こえてきたのは、「アイオロス」と名乗る、謎の声。謎の声の主は、エンノイアの願いをかなえ、エンノイアの母親を恋人から取り戻してくれるという。そのためには、「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を割らなければならない。エンノイアは謎の光に包まれ、未知の国、アイオリアへと旅立つ。エンノイアはそこで、さまざまな人たちに出会い、数奇な運命に巻き

込まれていく……。

プロローグ 王（前書き）

以前第一話の冒頭としていたものを、プロローグとして分割しました。

内容は変わりません。

ブローグ王

「王よ、どうされました？」

側近だろうか。ゆったりとしたローブをまとった青年が尋ねる。腰まで伸ばした髪は水色、先のほうで緩く束ねられている。

「この国に闇が迫っている……。新しい王を見つけなくては」

ベールをかぶった女性が、水晶に手をかざす。ここからではよく見えないが、何かが映し出されたい。かぶったベールから、先ほどの青年と同じように、水色の髪がのぞいている。

「アイオロスよ。ここに映し出す者をこの国へ導きなさい。この国の新しき王となるべき人間を！」

第一話 選ばれし少年

> i 2 9 7 1 6 — 3 7 8 1 <

不思議な夢を見た。どこかの国の王様が、新しい王を探すのだ。

ピピピ……。ピピピ……。

うるさいな……。

耳元で目覚まし時計がけたたましく音をたてている。

ピピピ……。ピピピ……。

わかったよ。起きるよ……。

僕は、しきりに落ちようとしてくる上まぶたと闘いながら、目覚まし時計に手をのばした。

「……？」

下りない。

というか、すでに下りている。

多くの目覚まし時計がそうのように、僕の目覚まし時計はセットするときはレバーを上へ上げ、止めるときは下げる、という仕様になっている。

だが、レバーはすでに下りている。なのに目覚まし時計は鳴り続けている……。

「わぶつー!!」

突然、顔に変なものが当たった。モサツとかワサツとかいう感触。黄色い羽根が舞い散る。

羽根……？

「ピピッ！」

ここでようやく目が覚めた。音をたてていたのは目覚まし時計ではなく、一羽の鳥だったのだ。

昨日、目覚まし時計をかけ忘れたんだな。

僕の目の前にいたのは、トサカのように羽がピンと立った、黄色い鳥だった。僕の顔に突進してきたソイツは、部屋中を嬉しそうに飛び回っている。

種類は何だろう。インコのようにも見えるが、大きさは僕の顔ほどもある。よく知らないけど、オウムとかの類いかもしれない。

だいたいなんで僕の部屋に鳥が……？

「エンノイアー？ 起きてるんだったら下りてきなさい」

「あ、はい！」

ちょっと迷ったが、その鳥を肩にのせると、僕は一階へと下りた。

一階へ下りると、母さんは朝食の支度をしていた。階段を下りてきた僕に気づくと、振り返って言った。

「あら、そのコ、気に入った？」

「えっ！？ 気に入った、ってことはまさか……」

まさか、母さんが僕に？

すると、母さんは満面の笑みで答えた。

「そ。ロバートがあんたにつて。」

……僕は心底がっかりした。
だが、母さんはまだ嬉しそうに続ける。

「優しいよね」 今度会ったらお礼言つのよ

ハア……。

とりあえず、自己紹介をしようと思う。

僕はエンノイア・グノーヴァー。13歳。半年前に私立の中学に入学したばかり。両親は離婚していて、今は母さんと二人暮らし。父親については……あんまり話したくないな。

ロバートっていうのは、母さんの今の彼氏。もう付き合って三年ほどになる。母さんは今の通りロバートに熱をあげているようだけど……。僕はロバートのことがあまり好きじゃない。

「ところでエンノイア」

「うん？」

今日の朝食はパンとコーンフ레이크。バターを塗ったパンにかぶりつきながら、母さんの言葉を待つ。

「今日は早く帰って来てね。大事な話があるから……」
妙に意味深な表情で言う。

「う、うん……」

何だろう？

「へえ、いいなあ！」

「うん。デュークって名前にしたんだ」

ここは中学校の教室。

今話しているのは、スティーブといって、クラスで一番仲のいい友達だ。

そうそう。あの鳥、飼うことにしたんだ。名前はデューク。

「それにしても、ロバートからもらったっていうのが気に入らないよ。あいつ、母さんにいいとこ見せたいだけなんだ」

すると、スティーブが聞いた。

「ロバートのどこがそんなに嫌いなんだ？ 俺、この前、お前んちに行った時会ったけど、いい人そうだったじゃん」

「どこってわけじゃないけど……」

自分でもよくわからない。ただ、母さんとロバートが楽しそうに話しているのを見ると、なんだかイライラするんだ。

「はーん。ヤキモチだな」

「ヤキモチ？ どういうこと？」

「お前はそのロバート、に母ちゃんを取られるのが怖いんだろ。母ちゃんを一人占めしておきたいんだ」

「ば……！ 違うよ！！ そんな、子供じゃあるまいし」

「ほら、席に着けー。授業始めるぞ」

カチカチカチカチ……。

時計が9時10分を指している。呆然と時計を眺めながら、考える。

ヤキモチなんかじゃないけどさ……。

なんていうか、ロバートには男らしさが無いんだよ。いつもへらへら笑ってるんだ。母さんもあいつのどこがいいんだか……。

「……ノイア」

「？」

誰かに名前を呼ばれたような気がした。

あたりを見回してみたけど、先生は相変わらず教科書を読んでいるし、他の生徒が呼んだ気配もない。気のせいか……。

「……エンノイア」

今度は確かに呼ばれたような気がした。ふと、窓のほうを見ると……。

「デューク!!」

なんと、教卓の横にある窓の外に、デュークがとまっていた。窓ガラスをくちばしでたたき、侵入を試みている。

なんか、いやな予感……。

パリン!!

デュークはくちばしで窓ガラスを割ると、またまた嬉しそうに、僕のほうに飛んできた。

「デューク! どうしてここに？」

デュークの代わりに、怒りに震えた先生の声が返ってきた。

「エンノイアくん……。それは君のペットかね？」

見上げると……。最悪なことに、デュークは先生の頭の上に大変な落とし物をしていた。

「あーあ！　しばられた、しばられた」

あの後、僕は2時間みっちりお説教を食らった。（僕が連れてきたわけじゃないんだけど）

デュークは何食わぬ顔で飛び回ってるし。

そうだ。今日は早く帰れて言われてたんだっけ。すっかり遅くなっちゃったな。

僕は家の玄関のドアを開けた。すると……。

（ロバート……！？）

居間でロバートと母さんが話している。普段は化粧もしない母さんが、今は髪をたらし、妙にめかしこんでいる。

「なんだ。ロバートが来てたのか」

何だか無性に腹が立ってきて、僕はそのまま居間を素通りして、二階の自分の部屋に上がろうとした。しかし、

「エンノイア？　帰ってるんだったら、こっちへ来なさい！」

母さんに呼びとめられてしまったので、僕は仕方なく居間へ向かうことにした。

「やあ、エンノイアくん、久しぶりだね。おや？ その鳥は。よかった、気に入ってくれたんだね！」

僕は、デュークを肩に乗せたまま居間に来たことを、ひどく後悔した。

「別に。こんなもの、もらっただって、迷惑だよ」

「エンノイア……！」

母さんがヒステリックに怒鳴りつける。

「あはは。それもそうだね。悪かったね」

これだ。ロバートのこういうところが腹立つんだ。たまには怒ってみればいいのに。

「ごめんなさい、ロバート。普段はこんな子じゃないんだけど……」
「で？ なんなのさ。大事な話って」

イライラしてきたので、母さんの言葉をさえぎって聞いた。

「あ、それがね。私たち……結婚しようと思うの」

「え……？」

「結婚……って……、どうして……？」

最後の方はほとんど声にならなかった。

「どうしてって。あんただって私たちが付き合ってること知ってるでしょ。」

「そういうこと言ってるんじゃないよ！」

ロバートと母さんが、面喰らった表情でこっちを見ている。

「どうしてこんなやつと結婚するんだよ！ 母さんはいつもそうだし！ ちょっと優しくされたらすぐその気になって。こいつだって、結婚したら父さんみたいに豹変するに決まってる。こいつが新しい父親だなんて、僕は認めないからね！」

無我夢中でそう言い終わったとき……。

ピシヤッ。

頬に鈍い痛みが走る。

母さんが僕の頬を叩いたのだ。

「レナ！」

ロバートが慌てて母さんを制止する。

「あんたはどうしてそうわからず屋なの……！ そりゃ、いきなり『この人が新しい父親です』なんて言っても、無理だと思う。だけど、あんたは一度でもこの男性のことを理解しようとしたことがあるの！？ ロバートは一生懸命あんたと打ち解けようと頑張ってるのに……」

「よさないか、レナ！」

ロバートが、母さんをなだめながら椅子に座らせる。

「ともかく、座ってゆっくり話そう。ほら、エンノイアくんもこっちにおいで」

「……いだ」

「え？」

「母さんなんて大っっ嫌いだー！！！」

バタンツ！

「あ！ エンノイア！！！」

僕は、たまらず玄関から飛び出し、街の中を駆け出した。

……どうしてあいつなんだよ。

母さんが仕事で疲れてるときも、父さんが長く家に帰らないときも、支えてきたのは僕なのに。

街の人が驚いて、駆けている僕の方を見る。

でも、気にもとめず走り続ける。

やっぱりヤキモチなのかもしれない。でも、怖いんだ。母さんが僕よりロバートの方に行っちゃうのが。

お願いだから、僕を一人にしないでよ。

涙がこぼれてきた。それをごまかすように、僕はひたすら走り続けた。

……十分ほど走っただろうか。ふと気づくと、僕は川原に立っていた。

川原の周りに立った木々の葉が、寒そうに揺れている。まだ、春というには早すぎる3月。川からひんやりとした空気が流れてくる。日が暮れてきて、あたりは肌寒くなってきた。

……コートを着てくれれば良かったな。

少し冷静になって、あらためて考える。

これからどうしよう……。

今すぐ家に帰るわけにはいかないし……。

いや、帰るもんか。ずっとここにいて、心配させてやろう。そう思ったとき……。

「…エンノイア」

いつかも聞いた声が、僕の名前を呼んだ。

そうだ、この声、今朝教室で聞いたのと同じだ。

「誰！？　どこから話してるの！？」

僕は宙に向かって聞いた。

あたりには誰もいない。近くの木の子に、デュークがとまっているだけだ。木々のざわめきが、一層激しくなる。

「我が名はアイオロス。……お前はあの男から母親を取り戻したいのだろう？」

「！！」

「取り戻す」という言葉に、僕の心は動揺した。

それに、なぜ声の主はそんなことを知っているんだ？

「と、取り戻したいなんて……。僕は別に……」

「隠さずともよい。私にはお前のことがわかってるのだ。」

僕のことをわかってる？

一体誰だというのだろう。

すると、声の主がとんでもないことを言い出した。

「その願い、かなえてやろう。」

「ほんとに！？」

「ただし、条件がある。アイオリア国の、国王が持つ、『プネウマの鏡』を割ってほしい。そうすれば、願いをかなえてやろう」

アイオリア？　まだ世界地図はよく覚えてないけど、そんな国は聞いたことがない。

「アイオリアって……そんな国どこに……」
そう言いかけたとき、目の前が明るく輝いた。あまりの眩しさに、まわりが見えなくなる。木々のざわめきも、川の流れる音も消えていく……。

そのうちに、僕の意識は遠のいていった……。

つづく

第一話 選ばれし少年（後書き）

はじめて投稿します。

よかったら感想等、聞かせてください

第二話 森の狩人

> i 2 9 7 1 7 — 3 7 8 1 <

サワサワサワ……。

心地よい風が吹く。木々の葉がこすれる音がする。

先ほどのように冷たい風ではない。どこか優しく、暖かい風だ。

そつと目を開けてみる。徐々に視界が鮮明になり、そこが森であることが分かった。青々とした緑が日の光を受けて輝いている……。

「森!？」

とつさに飛び起きる。頭や体の上に落ちていた葉っぱが、衝撃で舞い上がった。

「川原にいたのに……どうして森に……?」

僕の町の近くには確かに森があるが、今の季節はこんなに緑豊かではない。それに、どう考えても、自分の足で森まで歩いてきたとは思えない。

ガサツ。

ふいに、背後で物音がした。

「な、何……!？」

身をこわばらせて、次の反応を待つ。

フー……フー。

何者かの息遣いが聞こえる。おそらく、獣の。

おそろおそろ後ろを振り返る。すると、一匹の獣が僕の目に映った。

角は三本。顔の正面に一本、左右に一本ずつだ。体は獣らしく毛に覆われているが、その毛は淡い黄緑色をしていて、僕が今まで見たどの生き物とも一致しなかった。背丈はかなり大きい。四足歩行の状態で、僕の身長と同じくらいだろうか。

背に、亀のような甲羅を背負っている。甲羅に刻まれた六甲模様の隙間から、雑草が生えている。その姿が、なんとも滑稽で、愛らしいと言えなくもない。

しかし、今の僕に、愛らしいなんて言っている余裕はなかった。

どんな危険な生物か、わからないからな。僕とそいつとの距離は今、一メートルにも満たない。

とはいえ、見るからに愚鈍そうな獣だ。刺激しないよう、静かに後ずさる。そうして、そつと立ち上がった時……。

ザッザッ！

僕の動きの何が気に入らなかったのか、そいつは前足で勢いをつけると、いきなり僕に向けて突進しだした！

「うわあああああああ！！dfjslksadsfd」

もはや気が気じゃない。僕は意味不明な言葉をわめきながら、森の奥へと走った。だが、獣はしつかり僕の後を追いかけてくる。

突然、何かに蹴つまづいた。あわや転ぶというところで、もう一方の足でなんとか踏みとどまる。見ると、地面にロープのようなものが這わせてあるが……？

すると、今度は頭上から木の杭がふつてきた！それも何本も何本も。円を描いて落ちてくるので、僕はその円の中心に避難した。ふつてきた木の杭は、先がとがっているので、うまい具合に地面に突き刺さっていく。

ようやく、木の杭の落下がおさまった。幸い、この木の杭におびえて、獣は追跡をやめたようだ。グルル……と喉を鳴らしながら、二、三メートル離れた場所から僕の方を見ている。

ハアアアア……。

一息ついて、あたりを見回す。間近の木の枝に、果物の束のようなものがぶら下げたある。自然に生えたものではない。果物の束を網でできた袋に入れて、誰かが木の枝にぶら下げたようだ。

そうか、罨だっただんな。よく見れば、木の杭のあいだあいだに網がはられている。

あの獣が、ここにある果物を求めて走る。すると、地面に張られたロープに足を引っ掛ける。頭上から、網をはった木の杭がふつてきて、獣を取り囲む。と、まあ、そういうことだろう。それにしても、誰がこんな仕掛けを作っただろう。

「伏せろ!!」

ふいに、頭上から声が聞こえてきた。えっ!?! 伏せろって……!?

「ガアアア!!」

なんと、遠くにいると思っていたあの獣が、すぐ目の前まで迫っていた。牙の生えた口を大きく開いて、今にも僕に飛びかかるようにしている! いや、僕に飛びかかるようにしているのではなく、後ろの果物を狙っているのか? どちらにしても、危険な状況であることに変わりはない。

「伏せろって言うてるだろ!」

そ、そうか。伏せるのか……。

僕があわてて頭を下げると、僕の頭のとっぺんの毛をかすめて、何かがものすごい勢いで飛んできた。

それは獣に向けてまっすぐ飛んで行き、獣の額に命中した。矢だ! 誰かが木の上から矢を放ったらしい。

さらに二本の矢が放たれる。一本は獣の首に、一本は脇腹に命中した。

獣は悲鳴を上げながら、しばらく暴れていたが、やがて横に倒れると、動かなくなった。

おそろおそろ木の上を見上げてみると、そこにいたのは、大きな弓をもった……少年だった。太い木の幹に腰かけて、不機嫌そうにこちらを見ている。年は僕よりも少し上のようだ。16~17歳と

いったところだろう。黒いベストの上に、皮の上着を着て、ブーツを履いている。その手に持った弓だけでなく、腰のベルトには短剣、ブーツには小ぶりのナイフをさしている。しかし、僕を驚かせたのはその弓の腕前でも、その妙に古風な装備でもなかった。

肩までたらされた髪が、真っ白なのだ。シルバーブロードとでもいうのだろうか。ほとんど色のないその髪は、あたりの葉の色を反射して、淡く緑色に輝いている。さらに、角度によって銀色、紫色……と微妙に表情を変えている。

僕が少年の方をぼうつと見ていると、彼が口を開いた。

「あーあ、罨を台無しにしゃがって。生け捕りにし損ねたじゃねーか」

その美しい容姿とは裏腹に、ぞんざいな口調。

ともあれ、彼が不機嫌そうにしている理由が分かった。この罨は、彼が仕掛けたものだ。さっきの変な獣を捕まえるために。それが、僕のせいで失敗してしまったのだろう。

だけど、僕だって必死だったんだからな。

「あの……助けてくれてありがとう。それで、ここは一体……」

僕が話し終える前に、少年が木の上から下りてきた。そして、僕の前に歩み寄ると……。

??

網ごしに、僕の顔をじいっと見つめ始めた。手をあごに当て、何かを考え込んでいる様子だ。

「な、何ですか？」

「……かわいいな」

僕は、混乱した。

か、かわいいって……。確かに、クラスの女の子に「エンノイアくんって、かわいいー！」とか、言われたことあるけどさ。そういうことは、男には言われたくないっていうか……。

僕が一人でどきまぎしているのにはかまわず、彼は続けた。

「羽がきれいだよなー」

ん？ 羽？

僕に羽なんかあったか？

「ひゃっ！」

そのとき、背中に妙な衝撃があった。目の前に黄色い羽根が舞った。

そうだ、黄色い羽根といえば……！

「デュークー！」

なんと、そこにいたのはデュークだった。いつの間にか、近くにいたらしい。

毎度のことながら、神出鬼没だな。こいつ……。

でも、よかった。ここがどこだかわからないけど、一人じゃないだけで、ずいぶんましだ。

「それで、ここは一体どこなの？」

僕は、目の前の少年に問いかけた。ちなみに、僕はさっき、ハマっていた罠から出してもらっていた。

「何だ、お前よそ者か？ここはパーンの森。アイオリア島の最南端だ」

「アイオリア！？」

僕は、耳を疑った。

アイオリアって。そう、確か、あの天の声が言っていた言葉。母さんをロバートから取り戻す代わりに、僕に課せられた条件。

「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を壊せ、と……。僕はその、聞いたことのない国、アイオリアに来てしまったというのか？

僕が一人考えていると、弓の少年は、ブーツにさしていたナイフを取り出し、さっき彼が倒した獣の皮を剥ぎ始めた。

「な、何をしてるの？」

突然の行動にぎよつとした僕は、聞いてみた。

「皮を剥いでるんだよ。皮は都で売れるからな。生け捕りなら、家畜として高く売れるんだが」

「へえ……」

この国の人たちは、こんな動物を家畜にするのか……。

それはともかく、僕は再び考えた。あの、天の声。アイオロスと
か言ってたっけ。あいつが、言っていたことだ。

「アイオリア国の、国王が持つ、『プネウマの鏡』を割ってほし
い」……。

国王って都にいるものじゃないのかな。

「よし、決めた！」

なんだ？ という感じで少年が振り返る。

「この人に、都まで連れて行ってもらおう！」
ドテツ。

少年がわざとらしくよろけてみせる。意外にノリのいい人だな。

「なんだそりゃ！ 勝手に決めんな！ だいたいなんで俺がお前を
都に連れてってやらなきゃいけないんだ！」

彼がもつともなことを言った。でも、僕は引き下がらないぞ。

「お願い！！ 僕は、どうしても都に行かなきゃならないんだ。で
も僕は道もわからないし、さっきのやつみたいな化け物も倒せない
し」……」

「だめだな」

少年は、あっさりと否定した。

「都に行くためならなんでもするよ、仕事も手伝うよ！？」

なおも食い下がるが、

「そういう問題じゃねーよ。俺は今すぐ都に行く気はねーし。だい
いち」……」

少年が僕の襟首をつかんだ。

「……俺は人間ってのが大嫌いなんだ。とつとと失せる。俺がお前
に優しくしてられるうちになー！」

ドサツ。軽く突き飛ばされた。

「じゃあな。モンスターと魔物に気をつける」

そう言って、少年は立ち去ってしまった。一人取り残されて、デュークと顔を見合わせる。（こいつ、人間みたいな動きをするんだ）いけそうだったのに。口は悪いけど、なんだかんだでいい人だったし。それに人間が嫌いって……じゃあなんで僕を助けてくれたんだろう？

まあ、考えても仕方ないか……。僕は、とりあえず歩き出すことにした。

ここが、最南端って言うてたな。北に歩けば森の外に出られるだろうか？ 今は夕方みたいだから、太陽が沈みかけている方角が西ということとは、太陽に向かって右向きに進めばいいのか。

僕は、とりあえずそう考えることにして、この見知らぬ大地を歩き始めた……。

つづく

第二話 森の狩人（後書き）

よかったら感想等、聞かせてください

第三話 暗闇の中で

何時間歩いただろう。すっかり日が暮れて、太陽も見えなくなつた。

しかし、一向に森から出られる気配がない。

方向が間違つていたんだろうか。それか、ものすごく広い森で、歩いて出るには何日もかかるのかもしれない。

もう、限界だ。喉はからからだし、お腹も空いた。

とうとう僕は、一本の大きな木の根元に、座り込んでしまった。

「ピピッ」

デュークが、心配そうに僕の顔を覗き込む。

「デューク……。お前、飛べるんだから、どうなってるのか見てきてよ」

通じるわけがないと思いつつ、つぶやいただけだったが、意外にもデュークは「わかった！」と言わんばかりに一声鳴くと、空高く飛んで行った。

しばらくして、デュークが戻ってきた。ひどくあわてている様子だ。

「ピピッ！　パイ！　ピピピッ！」

「な、何？　なんて言ってるの？」

羽をばたつかせて、しきりに何かを訴えているが、僕にはさっぱりわからない。

僕が鳥の言葉でも話せばいいんだけど……。

「あ！　デューク……！」

しびれをきらしたのか、デュークはどこかへ飛び去ってしまった。

デュークがなかなか戻ってこない。

……もう、僕のことを見捨ててしまったんだろうか。
そりゃ、そうだよな。まだ、飼い始めてから一日しか経ってないんだし。さほど、なついてるってわけでもなかった……かもしれない。

だけど、デュークまでいなくなってしまうと、僕は本当に独りぼっちだ。

真っ暗な森の向こうから、不気味な獣の鳴き声や、うなり声のよなものが聞こえる。

……ふいに、暗闇に恐怖を感じて、身震いした。

あの少年が言ってたっけ。「モンスターと魔物に気をつけろ」って。

あの三本の角の怪物が「モンスター」なのかな。

じゃあ、「魔物」……って何だろう。

たくさん恐ろしいイメージが、頭をよぎる。

(そんなもの、いるわけない!!)

僕はあわてて頭からそれらのイメージを振り払うと、暗闇から、
明るい月の方へと視線をうつした。

母さん、心配してるかな……。

煌々と輝く月を眺めながら、ふと、母さんのことを考える。

いつもなら今頃、学校であったことを話しながら、母さんの手料理を食べているのに。

……ちゃんと、話し合えばよかった。母さんと、ロバートと。

僕……、何やってるんだろう。

何だか、悲しくなってきた。すごく……みじめな気分だ。

僕が落ち込んでいると、背後から鳥の羽音が聞こえた。

デュークだ！　きっとデュークが戻ってきてくれたんだ！

僕のことを見捨てたわけじゃなかったんだ！

「デューク！」

嬉しくなつて、振り返る。

しかし、僕の目に入ったのは、デュークではなかった。

背後の森に、無数の目、目、目。小さく鋭い二つの光のセットが、森の中の暗闇から、大量にのぞいていたのだ。

羽音がいつそう音量を増して、不吉に響いてくる。

「ひっ……！」

僕は恐ろしくなつて、その場を立ち去ろうと、駆け出した。

と、その時……！

「うわあー！」

黒い塊が、僕に向かって大量に飛んできた。羽音の正体は、無数のコウモリだったのだ。

無数のコウモリたちが、僕にまとわりつき、噛みついてくる。

一つ一つの痛みは大したことないが、こう集団でこられると、たまつたもんじゃない。

耐えきれず、地面に倒れ込む。体を左右に転がし、コウモリをはがそうと頑張るが、コウモリたちは、攻撃を緩めることもなく、まとわりつき続ける。

顔の周りにまでコウモリがはりつき、息ができなくなる。

絶え間ない攻撃と、息苦しさ、意識がもろろつとしてきた……。

僕、死んじゃうのかな。

こんな、わけのわからない場所で？　母さんと仲直りもできない
まま？

そんなの、嫌だッ……！！

必死に叫んだが、声にならなかった。

ヒュッ。

突然、二、三個の石ころが飛んできた。すると、コウモリたちが
一斉に僕から離れていく。

どうやら、飛んできた石を追いかけて行ったようだ。

一体、どうなってるんだ？

不思議に思いながら、傷だらけになってしまった体を起こすと……。

「まったく。見てらんないな。プテラスごときに死にそんな顔しや
がって」

そこにいたのは……信じられないことに、最初に会った少年だっ
た。しかもその肩には、デュークがのっている！

「プテラスは動くものを追う性質があるからな。出会ったら、あんな
まり動かない方がいいぞ」

話の内容から、さっきのコウモリのことを「プテラス」と言っている
のだとわかった。

いや、そんなことはどうでもいい。

「どうして、ここに？　それに、デュークも……」

少年は、こともなげに答える。

「さっき、こいつと会ったんだよ。聞けば、お前が道に迷ってるっ
て言うからさ」

僕は啞然とした。どうして、この少年は、そんなことがわかるの
だろう？

僕には、デュークが何を言っているのか、サッパリだったのに。

少年の肩にとまっていたデュークが、嬉しそうに、僕の肩に飛び移った。心なしか、得意そうな表情をしている。

と、ここで、僕はあることに気がついた。

「じゃあ、僕が道に迷ってるって聞いて、わざわざ助けに来たの？人間嫌いなのに？」

少年の方を見る。

自分でも、その発言と行動の矛盾に、気がつかなかったらしい。彼の顔がみるみる赤くなってきた。

「べ、別に、助けに来たわけじゃねーよ。俺は、こっちに、用事があつて……」

嘘だな。

顔を真っ赤にしながら、彼は何やら言い訳を続けている。その様子が無性におかしくて、僕は吹き出してしまった。

「な、なんだよ！ 何がおかしいんだよ！」

彼が怒りだしたのがまたおかしくて、一層激しく笑い続ける。ヒィー、涙を流しながら、笑い転げる。

緊張の糸が解けて、僕は……笑いが止まらなかった。

夜の暗闇の中に……僕の笑い声が、ひときわ大きく響いた。

つづく

第三話 暗闇の中で（後書き）

よかったら感想等、聞かせてください

第四話 闇からの襲来 part 1

目の前に、スープと一切れのパンが置かれている。そのスープの皿を両手で持つと、じんわりと温かさが伝わってきた。

小さく刻まれたキノコが浮いただけの、実に質素なものだが、それでも今の僕にはご馳走に違いなかった。

目の前には焚き火が燃えていて、火の爆ぜる音がなんとも心地いい。

僕は、夏休みのキャンプで焚いた、キャンプファイアーのことを思い出していた。

—— もつとも、あの時のキャンプファイアーはもつとずつとにぎやかだったけれど。

今は、肩の上でうつらうつらしているデュークを除けば、隣に少年がひとり座っているだけだ。

まだ幼さの残るその横顔は、彫刻のように美しく、軽やかで、非現実的にさえ感じられた。

少年の長いまつ毛が頬に深い影を落とし、両肩に落ちたシルバーブロンドの髪は、焚き火のゆらめきを映し出していた。

彼の名はシーア・ユークリッド。職業は、ハンターといったところかな。

各地の森を転々としては動物を狩り、その動物から得た骨や皮を街で売りながら暮らしているらしい。

まだ高校生くらいの年齢だというのに、なぜそんな暮らしをしているのか。気になったが、そこまでは聞くことができなかった。

（もしかしたらこの国では普通のことなのかもしれないけど……）

え？ なぜ僕が彼と一緒にいて、しかもご飯を食べているかって？

話は、僕がコウモリに襲われているのを、シーアに助けてもらったところまでさかのぼるんだけど。

助けてもらった後、シーアが、照れ隠しに言い訳していたのがおかしかったのと、緊張が一気にゆるんだのもあって、僕は笑いが止まらなかった。

『何がおかしいんだよ!』とか、『笑うのをやめないと怒るぞ!』とか、何やらわめいていたシーアだったが、突然、笑っている僕に、網でできたカゴをかぶせてきた。

「わっ! いきなり何するんだよ!」

「薪集めてこい!」

「はあ? 薪?

全くわけがわからない。すると、シーアが言った。

「仕事、手伝うって言っただろ?」

確かに言っただけど……。それは、都に連れていってもらった交換条件として言っただんだ。

あ、あれ? てことは……。

見れば、シーアはなんとも照れ臭そうにしている。

「一緒に行つていいの!?」

「まあ、この際しょうがないだろ」

何がしょうがないのかよくわからないが、とにかく連れていってもらえることになったようだ!

「さっさと薪集めてこいよ!」

そんなわけで、僕は彼と都に行くことになったのだった。

そうそう、なんとこのスープ、彼が作ってくれたのだ。

シーアは荷物の袋からいそいそと鍋を取り出すと、僕が集めてきた薪を使つて、焚き火を起し、あっという間にスープを作ってしまった。

これが、すごくおいしいんだ。きつと、いつも森で生活してるか

ら、こういうことに慣れてるんだろうな。

彼はさつきから、こっちの方を見向きもせずにスープを飲んでいくけど。

「ピピッ」

僕の肩の上で眠りかけていたデュークが目を覚まし、シーアの方へ飛んで行った。

「お、お前も食うか？」

シーアは、デュークに気づくと、手元のパンを細かくちぎり、デュークに食べさせ始めた。

満面の笑みを浮かべて、すごく楽しそうな様子だ。

彼が笑うのを、僕は初めて見た気がする。

そういえば、デュークのことを「かわいい」って言ってたな。

「動物が好きなんだね！」

僕が言つと、シーアは僕がその場にいることを忘れていたかのよう

うに驚いた。

「ま、まあな」

ちよつと気まずそうにした後、

「動物は裏切らないから……」

聞こえるか、聞こえないくらいの声で、つぶやいた。

動物は裏切らない？

なんかよくわからないけど、意味深な言葉だな……。

「さて、明日も歩くし、そろそろ寝るか」

シーアは、先ほどの荷物から、薄い布を二枚取り出すと、それを地べたに布団のように敷いた。促されるまま、その中に潜り込む。

「あれ、シーアは寝ないの？」

てつきり、もう一組布を出すのかと思ったら、シーアは木にもたれて座ったままだ。

「ん？ ああ。俺は火の見張りだから」

そうか。ここにはあの変な怪物とかがいるもんな。火を絶やしちやいけないんだ。

っていうか、それをシーア一人に任せていいんだろっか!? 僕も交代で見張った方がいいんじゃないか?

「当ったり前だ。二時間したら起こすからな。さっさと寝ろ」
なんだ、シーアは初めからそのつもりらしい。

しかし、僕はなかなか眠ることができなかった。寝ている地面が固すぎるせいもあるが、いろんな考えが絶え間なく頭をよぎって、落ち着かなかったからだ。

——母さんは、どうしているだろう。結局、夜も帰らなかったことになる。きつと、心配しているだろうな……。

——そうだ、今日は見たい番組があっただっけ。母さん録画してくれているかな。

——明日の学校はどうなるんだろう。無断で休んだら怒られないかな?

眠れないな……。

ふとシーアの方を見ると、彼は木にもたれかかったまま、顔を伏せていた。

僕が声をかけると、すぐに伏せていた顔を起こす。眠っていたわけではないらしい。

どうにも考えがまとまらないので、彼に話しかけてみることにした。

「シーア、ブネウマの鏡……って知ってる?」

意外にも、すぐに返答がきた。

「ああ、聞いたことあるな。確か魔界と通じてるって……」

「ま、魔界!? 魔界なんてものが本当にあるの!」

僕は、驚いた。思わず布団からはね起きる。

モンスターに、魔物に、魔界だって？ 非現実的にもほどがある。
「さあな。でも、魔物は魔界から来るらしいぜ」

「その、モンスターとか、魔物とかって何なの？」

さつきから気になっていたことを聞いてみた。

「そんなことも知らねーのか？」

だってしょうがないじゃん。僕の国にはそんなものないんだから。

シーアは、ため息混じりに、説明を始めた。

「いいか。モンスターっていうのは、長い間、月の光を浴び続けた動植物が変化^{へんげ}したものだ。俺がさつき捕まえようとしていた、三本角のアイツなんかがそうだ。多少凶暴だが、奴らのテリトリーを侵さない限り、普通襲われることはない」

へえ……。でもアイツ、元は何の動物だったんだ？ あんな動物見たことないぞ。

「アイツは、雑草か何かだろ。最もありふれたモンスターだとも言えるな。トリプスって呼ばれてる」

そういえば、甲羅のような背中に雑草が生えてたっけ。しかし、随分とアクティブな雑草だ。

「対して、魔物ってえのは、魔界から来る、と言われてる生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともある。大抵は夜にしか出ないな」

なんだか、ものすごい話になってきたな……。

森の中を闊歩するモンスター。魔界と呼ばれる場所から来るといふ魔物たち。そして、その魔界と繋がっているという、プネウマの鏡……。この国は、僕の住んでいる世界とは随分と異なるようだ。

眠れるわけないと思っていたが、さすがに精神的な疲れもあつてか、シーアが話を終える頃には眠りに落ちていた。

もつとも、二時間後にはきっちり叩き起こされたけど。

見張りを交代し、二時間後ほど経ったところで、再びシーアを起

こし、眠りについた。

「私たち二人きりで暮らすことにしたの。エンノイア、あんたが邪魔なのよ」

母さんが、ロバートとどこかへ行ってしまう。

——嫌だ！ 僕を置いていかないで！

「母さん！」

叫びながら、母さんの背中を必死でつかむ。

「母さん！ 行かないで！」

やった！ つかまえた……！

「誰が母さんだ」

つかまえたのは、母さんではなかった。

寝ぼけ眼をこすりながら、よく見ると、それはあきれ顔をしたシアだった。僕は間違っ、て、シアの上着をつかんでいたらしい。なーんだ。夢か。てっきり母さんが、僕をおいてロバートとどこかへ行っちゃうのかと思った。

「それで、あとのくらいかかりそうなの？」

昨日の残りのスープを食べた後、僕たちは早々に出発した。

「そうだな。あと三日ってとこかな……」

「三日あ！？ もうちよつと早く行けないの？」

三日も留守にするなんて。喧嘩して飛び出してきたとはいえ、いくらなんでも母さんが心配するよ。下手すると搜索願いなんか出されちゃうかもしれない！

「無茶いうなよ。馬でも一日かかる距離なんだから」

馬を基準に言われてもよくわからないけど……。

ガサツ。

だしぬけに、森の中から物音がした。僕とシニアに、明らかな緊張が走る。

ガサツガサツガサツガサツ。

ついてきてるな……。姿は見えないが、木から木へ、飛び移っている気配がする。

トリプスではなさそうだ。もっと身軽なやつだ。

一瞬昨晚のコウモリたちが頭に浮かぶが、少なくともあのような大群ではないだろう。

「シニア……」

「しつ。黙ってる」

見れば、シニアはとつくに弓を構えている。

ガサツ！

ソイツが僕らの横を通りすぎた時、シニアが矢を放った。放たれた矢はまっすぐ飛んでいき、木々の中に吸い込まれていったかと思うと、何か黒い物体を伴って落ちてきた。

シニアと共に、その物体に駆け寄る。

よく見ると、それは小さなドラゴンだった。

いや、実際のところ、ドラゴンなんて見たことがないけど。それは、物語なんかでよく見るドラゴンにそっくりだった。

ただし、すごく小さい。それから、足と翼は持っているが、手はないようだった。

「コイツは魔物だな……」

そのドラゴン？ を見て、シニアが呟く。

そうか、魔物……。

魔物とは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともあるという。

それにしてもおかしい。確かシニアは魔物は夜にしか出ないと言

つていたはずだけど……。

「そうなんだ。近頃明るいうちから魔物が出ることがある。これは何か、この国でおかしなことが起こっているのかもしれない……」

僕らはそれから、日が暮れるまで歩き続けた。

辺りが夕闇に包まれた頃、僕らの目の前に一つの村が現れた。

「村だ！」

僕は歓喜した。疲れ果てて、もう一歩も動けそうになかったからだ。

今日は晴れていたというのに、僕もシ어도雨に降られたように汗でびっしょりだ。

相変わらず元気なのは、鳥のデュークくらい。ちえ、飛べるやつはいいよな。

ともかくこれでゆっくり休める……。

「さて、ここら辺でひと休みするか！」

そう言いながらシ어도が荷物を置いた『ここら辺』とは、まだ村に入りきらない森の地面の上だった。

そして、昨日と同じように、焚き火を組み立て始めてしまった。

「む、村に入らないの!？」

僕が慌てて聞くと、シ어도はさも当たり前のように答えた。

「言つたろ。俺は人間が嫌いだって」

「で、でも……!」

足が棒になったように疲れていても、滝のように汗をかいていても、村の宿で休むことを拒否するほど人間嫌いだなって。

「それに、宿に泊まる金なんかねーし」

た、確かに……。

僕は家に財布を置いたままだし、向こうのお金がこの国で通用するとも思えない。民家に泊めてもらえるよう交渉することもできなかったかもしれないが、もう僕にそんなことをする体力は残っていないかつ

た。

「じゃあ、僕も野宿する……」

僕は、心底がっかりしながら、了解した。

シアはそんな僕の様子なんか気にも留めず、早速晩御飯の支度をしていた。

つづく

第五話 闇からの襲来 part 2

「……イア」

誰かが遠くで呼んでいる気がする。

「……ノイア」

まただ。

うつすら目を開ける。まだ夜中のようだ。

眠いんだよ。邪魔しないでよ。

ほんの少し身動きして、再び深い眠りに落ちようとしたとき……。

「エンノイア！」

僕は飛び起きた。

瞬時にあたりを見回して、自分の置かれた状況を理解する。

そうだ！ 今は僕が火の見張りをしていたんだっ！ 寝ている場合じゃない！

よかった……。火は消えてない。

煌々と灯った焚き火の炎を見ながら、ほっと肩をなでおろす。

やれやれ、今日は一日中歩いたからな。

昨日はシーアが先に見張りをしたので、今日は僕が先に見張りをすることになったのだが、なにしろ疲れた。

数分と経たないうちに僕は眠りこけてしまっていたのだ。

この国には、『モンスター』と呼ばれる、動植物が変化^{へんげ}し、凶暴化した生き物たちと、『魔物』と呼ばれる、魔界から来る生き物たちがいる。

森の中だから、普通の野生の動物なんかもいるだろう。

そういった者たちに襲われないようにするため、火を焚き、夜通し見張りをしなければならないのだ。

僕は、昨日襲われた、コウモリのような姿をしたモンスター——『プテラス』というらしい——のことを思い出して、身震いした。もう二度とあんなのには関わりたくない。しっかり見張らなきゃな。

両頬を軽くたたいて、自分自身を戒めた後、ふと、焚き火の反対側で眠るシーアを見た。

焚き火に照らされる、シルバードロンドの髪。肩まで届く長い髪を、束ねることもなく、無造作に投げ出している。

こちらからは顔は見えないが、スースーと寝息が聞こえる。

……彼について、気付いたことがある。

昨日の夜も同じように火の見張りをした。

二時間ずつ交代で、片方は見張りをし、その間片方は眠る。

……しかし彼は、僕と見張りを交代した後も、ときどき起きては僕の様子をうかがっていたのだ。

最初は、眠れないのかな、とか、僕が居眠りをしないか心配なのかな、とか、思った。

でも、次第に、僕を警戒してるっていうのかな……、僕があやしい動きをしないか、目を光らせていることがわかった。まるで、人間におびえる獣のように。

寝る時も決して短剣を手放さない。

普段は、ちよつぱり素直じゃないけど、優しくて、意外とノリが良くて、普通の少年に見える。

けれど、森の中に隠れ住み、他人の前で眠ることを警戒し、村に入ることを拒む。

そういったことが、シアがこれまでたどってきた人生を物語っているような気がした。

しかし、さすがに疲れたんだろう。今日はぐっすり眠っているように見える。

起きていた気配も、起きだす気配もなさそうだった。

ん？　ちよつと待て。

じゃあ誰が僕の名前を呼んで、僕を起こしたんだ？

「ピピッ！」

僕が考えていると、どこにいたのか、デュークがひどくあわてた様子で飛んできた。

デュークがあわてているのを見るのは、これで二度目だ。

一度目は、僕が森で道に迷っていた時。

なんとデュークは、一度は離れたシアを、呼びに行ってくれたのだ。

どういうわけか、シアにはデュークの言いたいことがわかるように、僕が道に迷ったことを悟り、助けに来てくれた。

僕には、デュークの言っていることはわからない。

でも、今回はそんな心配をする必要はなかった。

なぜなら、すぐにデュークがあわてている理由がわかったからだ。「げえッ！？」

ものすごい突風が顔に吹きつける。

とても目を開けていられない。

あんなに頑張って見張っていた火も、あえなく消えてしまった。

間もなく、突風を起こした原因のものが現れた。

ドラゴンだ！ とてつもなく大きなドラゴンだ！

緑色の大きな翼で、森の上空を優雅に飛んでいく。

足に、鋭い爪があるのがわかる。

よく見れば、そのドラゴンには手がなく、朝に見た小さなドラゴンに似ていた。

もちろん、大きさは全然違う。

片方の翼だけでも、僕の身長くらいはありそうだ。

「シーア！ 起きて！」

あわててシーアをたたき起こす。

しかし起こすまでもなくシーアはとくに起きていた。

あまりの風に立ち上がれないでいるようだ。

「魔物だ！ ワイバーンだ！」

シーアが叫ぶ。

そのワイバーンと呼ばれたドラゴンは巨大な翼をはためかせながら、僕たちの頭上を飛び去って行った。

飛び去った後もしばらく風は収まらず、あたりの木々の葉を巻きあげていった。

「逃げるぞ！」

呆然と突っ立っていた僕の腕をつかみ、シーアが急かす。

僕たちは取るもの取りあえず、息も絶え絶えに、森の中を走った。村から百メートルほど離れたところで、振り返り、様子を見ることにした。

そう、ドラゴンが飛び去ったのは、村の方向なのだ！

そして、僕は信じられない光景を目の当たりにした。

村の上空を飛んでいたドラゴンが、大きく息を吸うと、口から巨大な炎を吐いたのだ。

先ほどまで暗闇だった森の中は、明るく照らしだされ、ここまで熱気が伝わってきた。

熱気にあおられて、森のざわめきが激しくなる。

一瞬にして、村は炎に包まれた。

人の気配すらほとんどしなかった静かな村が、一転して悲鳴と轟音に包まれた。

燃え上がる家々から、次々と村人たちが飛び出してくる。

赤ん坊を抱えた女、親とはぐれたのであろう子供たち、炎に囲まれて行き場のなくなった老人……。

懸命に家を消火しようとする者もいたが、とても意味のあることとは思えなかった。

村が、文字通り地獄のように変わってしまったのだ。

すると突然、村の上空を飛んでいたドラゴンが下降し始めた。

「あ！ シーア！ 女の子が！」

村の中央広場に降り立ったドラゴンは、炎から逃れようと広場を逃げ回っていた少女の肩をその鋭い爪でつかむと、少女をつかんだまま再び上昇し始めてしまった！

「さらうつもりなんだ。大変！ 助けなきゃ！」

僕はシーアの方を振り返り、そう言ったが、

「いや……助けても無駄だ、行こう」

なんとシーアはそう言うと、村とは反対方向に歩き出そうとしていた。

「無駄……だつて？」

僕は耳を疑った。

見捨てろつていうのか！？

目の前で村が襲われているのに！？ 女の子がさらわれようとしているのに！？

……シーアはいいやつだと思つてた。

素直じゃなくても。人間嫌いでも。

なんだかんだで僕を助けてくれた。
それなのに……。

「そんなの納得できない!!」

僕は思わず叫んでいた。

シーアが驚いて僕の方を見る。

「弓を貸して！ 僕が助ける！」

僕はシーアが背負っている大きな弓を、すかさず奪い取ると、ドラゴンに向かって構えた。

弓の弦が思った以上にかたい。歯を食いしばりながら引くのがやっただ。

「お、お前、弓が使えるのか!？」

シーアが背後で叫ぶ。

「やったことないけど……」

弓を一層強く引く。弦が指に食い込んで痛い。

「やるしか……ないだろ……!!!!」

叫ぶと同時に、僕は矢を放った。

つづく

第六話 闇からの襲来 part 3

ヒュンッ!!

矢は、放物線を描きながら、勢いよく飛んで行った……………

……ドラゴンとは全然違う方向に。

当然ながら、ドラゴンは全くひるむことなく、少女をつかんだまままだ。

「あれ？」

「お前……下手だな」

シアがあきれた声で言った。

「貸せ。弓っていうのはこうやって射るんだ」

シアは、僕から弓をむしり取ると、その繊細な外見からは想像できないほど、軽々と弓を引いた。

そして、矢は正確にドラゴンの足を貫いた。

ギャオオオウ!!

ドラゴンは悲鳴を上げ、しばらく暴れていたが、やがて少女を解放した。

「あ！ 落ちるよ！」

少し高いところまで浮上していたので、放された少女は森の中に落下してしまったのだ。

「下は森だから大丈夫だろ。それより……来るぞ！」

シアが言うよりも早く、怒りに狂ったドラゴンが、こちらに向かって突進してきた！

ものすごい風圧で、何が何だか分からなくなる。

ドラゴンの鋭い爪が、目の前に迫ってきた。

身がすくんで、動くことができない。目を固く閉じ、身をかがめ、ドラゴンが過ぎ去るのを待つ。

一瞬、何かが覆いかぶさってくるような感触がした。

ビュウウウウウ。

ようやく、風がおさまり、おそろおそろ目を開ける。

……………？

特に、何事もなかったようだ。ドラゴンにさらわれたわけでも、怪我をしたわけでもない。

だが、シーアはそうではなかった。

苦しそくに息をつきながら、しゃがんでいる。

「くっ……………」

「シーア！」

なんと、シーアはあのドラゴンの鋭い爪で、肩を引っ搔かれていたのだ！

大怪我というほどではないが、服が裂け、血が出ている。

破れた服の隙間から、肌に痛々しい数本の筋が見える。

肩に触れようとすると、うるさそうに払いのけられた。

「いいからお前はあの女を助けに行け！」

「シーアはどうするの！？」

まさか、こんなところに置いては行けない。

「俺は、あいつを倒す……………！！」

ハア、ハア、ハア。

草木をかきわけながら、必死で少女を探す。

村からは少し離れたところに落ちたようだ。

ドラゴンは、再び村の広場のあたりを巡回していた。

下の方から、数本の矢が飛んでくる。

その何本かはドラゴンに刺さり、何本かはうまくかわされた。

（シーアが戦ってるんだな）

村の様子を確認してから、再び少女を探し始めた。

と、その時、草と草との間に、赤いスカートとそこから出た茶色のブーツの足が見えた。

あの女の子が履いていたものだ！

急いで草をかき分ける。

すると、落ち葉にまぎれて、一人の少女が倒れていた。

思った通り、さっきドラゴンにつかまっていた少女だ。

歳は、僕と同じくらいだろうか？ 金色の長い髪に、カチューシヤをしている。

気を失ってはいるが、幸い、目立った怪我はないようだ。

どうやって運ぼうか考えあぐねていたら、彼女が目を覚ました。

「あ……あなたが助けてくださったんですか？」

ありやりや。まいったな。

そうとも言えるし、そうでもないとも……。

とりあえず、僕はちやつかり手柄を自分のものにしておいた。

彼女に肩を貸し、歩きながら、僕はあることについて考えていた。さっき、ドラゴンに襲われた時。

一瞬何かが覆いかぶさってきたような気がした。

あれは、シーアが僕をかばってくれたのだ……。

だから、僕は怪我をせずにすみ、彼は肩を引っ搔かれてしまった。人間嫌いと言いながら、僕をかばってくれる。少女を見捨てると言いながら、今こうして村のために戦っている。

僕にはシーアがよくわからないよ……。

木の下に身を隠しながら、少女と共に村の入口まで行くと、シーアは相変わらずドラゴンに矢を放っていた。

しかし、残念なことに、ドラゴンの巨大な胴体には、シーアのちっぽけな矢などかすり傷でしかないようだ。

何本矢が刺さろうが、全く動じていない。

ドラゴンが再び大きく息を吸い始めた。
炎を吐く気だ！

「あーんママー！」
間の悪いことに、親とはぐれてしまった小さな子供が、広場に出てしまった。

ドラゴンがそちらを振り向く。

「危ね……！」

シーアがとつさに子供をかばった。

ちょうどその時、ドラゴンが炎を吐いた！

「うわああああー！」

「シーアー!!」

背中に炎をくらってしまった。

がつくりとうなだれるシーア。

「村に他に戦える人はいないの!？」

さつき助けた少女に尋ねる。

「若い男は皆出稼ぎに行っているんです……村に残っているのは女
子供と老人ばかりで」

本当に申し訳なさそうに、少女が答えた。

そんな……。じゃあどうしたら……。

突然、僕の脇からデュークが飛び出した。

そのまま真っ直ぐドラゴンへと向かって行く。

そして、ドラゴンの顔を嘴でつつき始めた。

「デューク！ 何をする気だ！」

案の定デュークはあっさりとドラゴンの翼に払いのけられてしま
った。

しかし、それでもめげずにまわりつき続ける。

とうとうしびれを切らしたドラゴンが、デュークに向かって軽く
火を吐いた。

軽くといっても、デュークにとっては全身が包まれるほどの炎だ。真っ黒になったデュークが、広場に墜落してきた。

僕はあわててデュークを助けに行った。

見るも無残な黒い塊が、煙を出しながら、広場に落ちている。

嫌だ嫌だ！ デュークが死んじやうなんて！

泣きそうになるのをこらえながら、そっとデュークを拾いあげると、少々羽が焦げてはいるが、デュークはピンピンしていた。

僕の顔を見るなり嬉しそうに羽ばたいた。

それを見て、なおさら涙が出そうになる。

「デューク！ どうしてあんな危ないことをしたんだよ！」

デュークを叱ろうとして、僕はドキリとした。

デュークの目は、真っ直ぐ僕を見ていた。

まるで、何かを訴えかけるように。

まるで、僕を試すように。

僕には、デュークの言葉はわからないけど。

その目線の意味は、わかる気がした。

「デューク、お前……、まさか僕に戦えって……？」

返事するように、デュークは一際大きな声で鳴いた。

そうだ、戦わなくちゃ！ 助けなきゃ！

村の人たちを。そして、シアを。

だけど、どうしたらいい？

僕には、力も、武器もない。

何か良い方法はないだろうか？

あたりを見回すと、家屋から焼け落ちた丸太が一本、落ちていた。

そうか、これなら……。

アイツは意外にも、炎を吐く時、特定の場所を狙って吐いている。魔物は知能が高いのだと、シアは言っていた。

僕は閃いた。

本当に、一か八かの方法だけど。
或いは、うまくいくかもしれない。

シーアは、新たな矢を取ろうとして、もう矢が残っていないことに気がついた。

ドラゴンが、勝ち誇ったように、シーアに向けて炎を吐く準備をしている。

不意のことに、シーアは避けることができず、立ち尽くしていた。

僕は大きく息を吐き、シーアを突飛ばし、かばった。

ゴオオオオ。

もろにくらうことは避けられたが、熱気が背中当たる。

背中が焼けそうなほど熱くなった。

「エ、エンノイア!？」

シーアが目を見開いて驚いている。

僕は、シーアをかばうようにして立つと、ドラゴンに向かって声高に叫んだ。

「やいワイバーン! 村を焼くなんてずるいぞ! 僕と正々堂々勝負しろ! 負けたら大人しく帰るんだぞ!」

シーア含めて、周りの人たちは皆「何を言ってるんだコイツは……」と言わんばかりにぼかんとってしまった。

ドラゴンにこんなこと言ってもしょうがないと思う。
でもセリフはどうでもいいんだ。

ヤツの気が引ければ。

僕は方向転換して、ドラゴンを挑発するように走った。
狙い通り、ヤツは僕の後をついてくる。

身を低くし、炎を吐く準備をしている。

徐々に高度を下げ、手の届くほどの高さになった。

そしてついに、大きく息を吸い込んだ……。
今だ！

僕は、さっき見つけた丸太を拾い上げると、それを勢いよくドラゴンの口にねじ込んだ。

やった！

突然のことにドラゴンは目を白黒させながら動揺している。

必死に足をバタつかせるが、丸太はドラゴンの口にピッタリとはまっているので、なかなか取れない。

さあ、これでとどめをさせば……！

ここで、僕は、自分の作戦の致命的なミスに気づいた。

僕にはドラゴンにとどめをさす手段がないのだ。

その時、ふいに肩を叩かれ、声が聞こえた。

「よし！ 後は任せろ！」

シニアだ！

シニアは腰のベルトから短剣を取り出すと、未だ暴れているドラゴンの腹に突き立てた。

ギャオオオオオオオオ！！

耳をつんざくような悲鳴が、村中に響き渡る。

シニアが勢いよく剣を引き抜くと、ドラゴンの腹からどす黒い血があふれ出てきた。

さらにもう一撃加えようと、剣を構える。

と、その時。ふいにドラゴンが翼をはためかせた。

「うわ！」

翼に弾き飛ばされるシニア。

ドラゴンはそのまま浮上すると、一気に飛び去ってしまった。
しばらく警戒して注意深く見つめていたが、どうやら村に戻ってくる様子はなさそうだ。

「ちっ、長い剣ならとどめがさせたのに……」

シーアがひとりごちた。

「シーア！」

僕はシーアに駆け寄った。さっきの肩の怪我と、服の背中が少し焼けていること以外は、特に大きな怪我はないようだ。

「この、ばか！」

ポカッ。

あれれ、てっきり褒められると思っていたのに。いきなりこづかれてしまった！

「なんて無茶なことをするんだ！ 失敗したらどうするつもりだったんだ！？」

再び手を振り上げた。またたたかれると思い、とっさに目をつぶると……。

「……だけど。お前見かけによらず勇気あるんだな。感心したぜ」

シーアはそう言って、僕の頭にふわりと手を置いた。

そっと目を開けると、シーアは笑っていた。

その様子を見て、胸に何か、熱いものが込み上げてきた。

この国に来てよかった。シーアに会えてよかった……。

大げさだけど、僕は、そんな気持ちになっていた。

僕は笑って、シーアとハイタッチした。

森の方から、何人かの人の声が聞こえてきた。

避難していた村人たちのようだ。

あの少女が言っていた通り、村人のなかには、老人と女子供しか見当たらなかった。

その中の、リーダー格と思しき老人が前に進み出た。

実のところを言うと、僕はちよつと不謹慎な期待を抱いていた。はつきり言って、僕たちはヒーローだ。この村を救ったんだから。

だからきつと、この後、村長に感謝の言葉なんかを言われて、村中の女の子にちやほやされて、村に伝わる宝なんかを貰ったりしてそんな勝手な想像をしていた。

しかし、男の口から告げられたのは予想外の言葉だった。

「お前たちは余計なことをしてくれたな」

「え……？」

「見る。村はすっかり焼かれてしまった。これで明日からどうやって暮らせというんだ」

そ、それはそうだけど……。

村が焼かれたのは僕たちの責任じゃない。

すると、その男は僕の隣にいたさっきの少女を見た。

「その娘を差し出せば魔物も大人しく帰ってくれたかもしれんのに

……」

「そんなぁ……！」

助けを請うように、シーアの方を見る。

しかし、シーアは、皮肉っぽい笑いを浮かべ、

「だから言っただろ？ 助けても無駄だって」

そう言って、村の外へと歩き出してしまった。

僕も、村人たちに追われるように、村を出た。

あの少女が、物言いたげに、村を去る僕たちを見つめていた……。

第七話 草原の都

村人たちに追われるように村を出た僕たちは、再び都に向けて歩き出した。

「そりゃ、感謝されたくて助けたわけじゃないけどさ。なににもあんな言い方しなくても……」

僕は、黙々と前を歩くシアアに、愚痴をこぼし続けていた。

「それに、納得いかないよ！ 村のために、あのコを犠牲にしようだなんて！」

すると、ずっと押し黙ったまま歩いていたシアアが、初めて口を開いた。

「人間なんてそんなもんさ。自分の利益のためなら、平気で他人を踏みにじるんだ……」

この言葉には、胸を締め付けられる思いがした。

それはおそらく、彼の経験から出た言葉なのだろう。

少女を助けることを、無駄だと言ったシアア。きっと、今までにも、幾度となく人に傷つけられ、失望させられてきたのだろう。

それこそが、彼の、人間嫌いの所以ゆえんなのかもしれない。

「あの……！」

ふいに、後ろから呼び止められた。

振り返ると、先ほどドラゴンにさらわれそうになった、あの少女が立っていた。

二人で僕らを追ってきたのだろつ、隣には母親と思しき女性も立っている。

少女は、かすり傷をおった右腕に包帯を巻いていた。

「やあ君はさっきの。もう怪我はいいの？」

「は、はい。お陰様で。あの、それより……」

少女はなんと辛そうな表情で話を続けた。

「さっきの村長の言ったこと……。どうかお気になさらないで下さい。近頃は魔物の襲撃が多く、村の者も気が立っているんです」

僕は驚いた。

この少女は、僕たちを励ますためにわざわざ追いかけてきてくれたのか？

「それに私は助けにただいですごく感謝してます！ だからどうか……気を落とさないで下さい……」

最後の方は、まるで懇願するようだった。

どうして、この少女を犠牲にすることなどできるだろう。

こんなに優しい女の子なのに……。

さっきの男（おそらく村長と思われる）の言葉が、胸に突き刺さる。

僕は、精一杯の笑顔で答えた。

「大丈夫。全然気にしてないよ！ 君にそう言ってもらえてよかった」

全然気にしてないっていうのは……嘘になるかもしれない。

しかし、少女は僕の言葉を聞いて、とても喜んでくれたようだ。

「そうだ！ あなた達は旅の方ですよね？」

旅なんて大げさなものじゃないが、曖昧にうなずいておく。

「うちのトラちゃんを使って下さい！」

「トラちゃん？」

「うちで飼ってるんです。元々はこの森にいるモンスターなんですけど。人に慣れてるから大丈夫ですよ！ 今連れてきます！」

そう言つと、少女はまた村の方へと駆けていった。

なんか嫌な予感……。

「これが、うちのトラちゃんです！」

そう言って少女が連れてきたのは、はじめこの国に来た時に襲われた、あの雑草モンスター——トリプスだった。

僕とトリプスはどうも相性が合わないらしい。

その『トラちゃん』は、僕を見るなりうなり声を上げ始めた。

そして、案の定、僕を追いかけ始めたのだった。

「あつ！　こら！　やめなさい！」

「うわああああああー！」

ここは、アイオリアの都、アエロポリス。

賑やかながらも、気品ある城下町では、今日も新鮮な食材を売る市場の音が響いていた。

家々の白い壁が、春の日差しを受けて輝いている。

街の最深部には、円柱状の柱で支えられた、王宮が見える。

柱には植物の蔓が巻きついていて、どこか有機的で優美な雰囲気醸し出している。

王宮の広間では、見るからに善良そうな顔をした老若男女が、目を輝かせながら、王の登場を今か今かと待っていた。

その人々をかき分けながら、後ろに数人の兵士を従えて、一人の男が歩いてくる。

王宮の奥へと続く扉に近づくと、見張りの兵士が、男に軽く会釈した。

兵士は、モヒカン頭のような飾りのついた兜をかぶり、サンダルを履いている。

「これはこれは、隊長どの」

「王はどこにおられる？」

少しいらだった調子で、男が尋ねる。

「中庭に行かれましたよ」

「中庭！？ お一人でか？」

「はあ。何でも大事なお客様がいらっしやるそうで……」

客が来るなど聞いていない。男はあからさまに怪訝な顔になった。

「客？」

「ねえシーア。これって端から見たら結構恥ずかしいよね」

「言つなよ。これだって歩くよりや速いんだぜ」

森を抜け、村を出て、小高い丘に辿り着いた僕たちは、トリプスの背に揺られながら、一路、都を目指していた。

「ほら、見えてきたぜ。王都アエロポリスだ」

丘から見下ろしたところは、一面の草原になっている。

シーアが指差した先を見て、僕は息を呑んだ。

丘の下は、その街を除けば、ただただ草原が広がるばかり。

大海原に浮かぶ一艘の舟のように、都は草原の中に忽然と姿を現した。

真っ白な建物と青々とした草原との、コントラストが美しい。

街は円形の城壁に囲まれているのだが、城壁の外まで建物がはみ出して、大きな街であることがわかる。

街の奥の方には王宮らしき巨大な建物と、神殿のようなものが見えた。

どちらも白大理石でつくられたエンタシスの柱。

僕は、古代ギリシャの遺跡を思い出した。

「すごい……」

僕が思わずつぶやくと、横に座っていたシーアが得意そうにはほ笑んだ。

「この地は……いや、このアイオリアから北のチュートニア、東のアデイスに至るまで、かつてテラスティアという巨大な国が支配していたんだ。アエロポリスはそのテラスティアの遺跡の上につくられた街だ。だから今でも千年前の雰囲気を残している。ほら、街の周りにもいくつか遺跡が見えるだろ？」

普段は無口なシーアが、急に饒舌に話したので、僕は驚いてしまった。

でも、見れば確かに、街の周りに遺跡のようなものが見える。城壁の周りには、朽ちた神殿の柱や、がれきが散乱している。その遺跡群と、現在都に建てられている建物があまり違わないことから、シーアの言う通り、都は千年前の、テラスティアという国の様式を引き継いでいるらしかった。

それにしても……。

シーアの話に出てきた地名、すべて聞いたことがない。僕は本当に、違う世界に来てしまったのだろうか……。

バサツバサツ。

落ち込んでいると、聞き覚えのある羽音が頭上に響いてきた。

ドラゴンだ！

つい先ほども僕たちを苦しめたあのドラゴンが、都の上空を飛んでいた。

「まさか都を襲う気！？」

「もうそれほどの体力はないと思うが……見つからない方がいいな」
シーアとそう話した時、目の前で信じられないことが起こった。
突然、ドラゴンが飛んでいる付近だけが曇りだしたのだ。

そして雲の合間から閃光が走り、雷の筋がドラゴンに命中した。

あつという間に黒焦げになり、墜落していくドラゴン。
突然の出来事に、僕もシリアも何が何だか分からなかった。

「魔法だ……」

シリアがつぶやいた。

「大きな街には魔法を使える神官がいるんだ。きっと、都の神官が、
雷の魔法で倒したんだろう」

魔物や魔界が存在するくらいだ。魔法と聞いても、もはや驚かなかった。

でも、すごいな。

弱っていたとはいえ、あんなに強いドラゴンを一撃で仕留めるなんて！

ドラゴンの末路を見届けてから、僕たちは再び都を目指しトリプスを進ませた。

いよいよ『プネウマの鏡』のある、都へ。

それを壊せば、母さんをロバートから取り戻してもらえる。

本当に、そんなことができるんだろうか？

仮にできたとして、僕は無事に元の世界に帰ることができるんだろうか。

胸にあるのは、不安か、期待か。

一歩一歩都に近づくたび、僕は、胸の鼓動が早まるのを感じていた……。

つ
づ
く

第八話 王宮へ

シーアの予想は当たっていた。

都の上空を飛ぶ魔物を仕留めたのは、都の神官、アーサー・クロアであった。

水色の髪を緩く束ね、白い上着を羽織っている。

「全くどうなっているんでしょうね、都の警備は……」

「アーサー様、お一人で倒すなんて無茶なことを……」
付き添いの兵士が、心配そうに言った。

兵士の手には、神官が集めた薬草が持たされている。

「あんなの雑魚ですよ。どういうわけか手負いでしたし」
神官は、手近に生えていた薬草を採った。

「おっと。早く王宮に戻らないと王様に叱られちゃいますね」

通りを馬車が行く。市場から商人たちの声が聞こえてくる。

肩に大きな袋を担いだ旅人、干し草を積んだ車を引くロバ、腰に剣を差した鎧の兵士。

本の中に出てくるような街の光景に、僕はただ啞然としていた。

城壁の門をくぐり、都に入った僕たち。

あの女の子に借りたトリプスは、街の外に置いてきた。シーアが森に戻るときに、返してくれるそうだ。

「向こうに見えるのが居住区。右奥に見えるのが大神殿だ。そして……」

シーアが言うよりも先に、僕はつぶやいていた。

「あれが……王宮」

街の最深部に、飛びぬけて大きな建物がそびえたっている。
遠くから見たときよりも、はるかに大きい。

白大理石の柱で支えられたその建物に、たくさんの人が出入りしているのが見えた。

兵士らしき姿も見える。

「じゃ……俺はこれで」

「えっ」

僕は思わずシーアの方を見た。

そうだ。都まで連れて行ってもらっ、っていう約束だったもんな。都に着いたら、もうお別れだ。

でも……。

「品物売るところまで手伝うよ！ ほら、仕事手伝うって言ったし！」

無理に頼んで都まで連れてきてもらったんだ。このまま別れるのは何だか悪いような気がした。

しかし、彼は軽く追い払うような仕草をして、言った。

「いーよ別に。それより王宮に用事あるんだろ？ 早く行けよ」

「うん……。ありがとう、シーア」

シーアは軽く肩をすくめてみせた後、踵^{きびす}を返し、さっさと反対方向に歩き始めた。

もともと人間嫌いだって言ってたくらいだ。彼らしく、実に淡泊な別れ方だった。

でも、もう二度と会えないかもしれないのに……。

ちよっぴり寂しい気持ちになりながら、王宮に向けて歩き出そう

とした時だった。

「あっ。そうだ」

シーアが、ふと思い出したように、こちらを振り返った。

「持ってけ」

腰のベルトから何かを取り出し、こちらに向かって投げる。

取り落とさないように気をつけながら、それを受け取って、手の中を確認すると……。

それは、短剣だった。

複雑な組み紐模様のついた、黒い鞆。

シアーが、あのドラゴンと戦ったとき、使っていたものだ。

「やるよ。丸腰じゃ何かと不便だろ」

僕が、ドラゴンと戦う時、武器がなくて困っていたのを知っているのだろうか。

何か熱いものがこみあげてきて、僕は叫んでいた。

「シアーー！！ いろいろとありがとうー！！ 元気でねー！！」

再び向きを変え、歩きだそうとしていたシアーに向けて、大きく手を振る。

シアーは後ろを向いたまま、そっけなく手を振り返した。

……そして、今度こそ本当に、立ち去って行った。

「さて、と……」

僕は、もらった短剣をズボンのベルトに差し込むと、王宮の入り口へと続く階段を上がっていった。

いろいろあったけど、ついにここまで来たんだ。

あとはプネウマの鏡さえ壊せば……。

王宮に入った僕は、驚いた。

入り口のすぐ先は大広間になっているのだが、そこに溢れんばかりの人がいたのだ。

街の人であろうエプロン姿の人から、旅人らしき人まで、様々な人たちが、王宮の大広間に詰めかけていた。

荘厳な王宮の様子を想像していた僕は、すっかり拍子抜けしてしまった。

どうして王宮の中にこんなに人がいるんだろう。

僕は、近くにいた男に尋ねてみることにした。

見るからに人の良さそうな老人で、僕を見てにつこり微笑んで答えてくれた。

「お前さん、他所から来たのかい？　王様は毎日この広間にいらっしやっては、ワシらの質問や要望に直接応えて下さるんじや。だから皆、王様に話を聞いてもらおうと詰めかけとるんじやよ」

へえ……。

「あ、ほら。いらっしやっただぞ」

老人が指差した先に、それらしき人物が見えた。

周りを兵士に守られながら、一段高くなった場所に立っている。全身をすっぽり覆ったローブに、白いベールという、質素な出で立ちだ。

ベールを目深に被っているので、顔はよく見えない。

王が現れたことで、広間が騒がしくなった。

老人の言った通り、広間にいた人々は一斉に王に詰めより、質問や要望を投げ掛けている。

ここからではあまりよく見えないが、王は動じることなく、ゆったりとした語り口で一人一人に應對しているようだ。

だけど、どうやってプネウマの鏡を探そう……。

この様子だと、とても王に近づけそうにない。

と、その時……。

「あつ！　デューク！　どこに行くんだよ！」

肩にとまっていたデュークが、勝手に飛び立ってしまった。

周りにひしめいている人々を必死にかき分けながらデュークを追うと、デュークは広間の脇にある廊下へ向かったようだった。

勝手に王宮の内部へ入っているのかどうか、一瞬悩んだが、このままデュークを放置するわけにもいかないので、僕は後を追うことにした。

廊下の先は、中庭になっていた。
建物が中庭をぐるりと囲み、回廊になっている。

中庭の真ん中には優美な噴水があり、周囲には豊かに茂った広葉樹が植えられている。

しまった！

中庭に見とれているうちに、デュークを見失ってしまった。

中庭の木の枝にでもまったのか？

そう思つて、植えられた木を見回していると、一人の女性の後ろ姿が目に入った。

その姿には見覚えがあつたが……その時はそれが何なのか、思い出すことができなかった。

僕はその女性に、デュークを見なかったか、尋ねることにした。

「あの……」

声をかけると、ウェーブのかかった長い髪を揺らしながら、その女性は振り返った。

……僕は息を呑んだ。

目を覆い隠してしまうほど長いまつ毛に、すんなりとした鼻、きゅっと結ばれた上品な唇。振り向きざま、ふんわりと良い香りがした。

僕はこれほどまでに美しい女性を見たことがない。

この時の気持ちをなんと表現したらいいんだろう。

僕は、一目で彼女のとりこになってしまった。

その女性は、なんとも変わっていた。

髪の色が水色だったのだ。

水色の髪なんて、見たことも聞いたこともない。

しかし、その水色の髪は彼女の美しい顔立ちに違和感なく溶け込

んでいる。

「あのー…何か私に用があるのでは？」

「あつ、すいません！」

いけない、いけない。

彼女に見とれて、声をかけた理由を忘れるところだった。

「黄色い鳥を見ませんでしたか！？　こう、トサカみたいな羽の立った……」

すると、彼女は惚れ惚れするほど美しい微笑みで、答えた。

「それは、この子のこと？」

彼女が軽く手を挙げると、どこからかデュークが飛んできて、彼女の手にとまった。

一体どうなってるんだ？？

「どうもありがとう！」

無事デュークを見つけた僕は、本来の目的を忘れ、木の下に腰かけて、その水色の髪をした女性と“おしゃべり”をしていた。

「僕、エンノイアっていいいます！　あ、こいつはデュークで」

ちゃっかり自己紹介しておく。

「ふふ。私はルイズよ。よろしくね、エンノイア、デューク」

そう言つて、ルイズは僕の手を握った。

ふわああああ……。なんて柔らかい手なんだろう。

ちなみに、彼女は僕よりもずっと年上のようなのだ。

ひよつとしたら、母さんと同じくらいの年かもしれない。（母さ

んは僕を十代の時に産んだから、他の家の親に比べたら若い）

でも……。母さんとは全然違う……。

「さてと、そろそろ行かなくっちゃ」

ルイズが立ちあがった。

ボールを取り出し、かぶる。

その様子を見て、僕は電撃が走ったように閃き、無意識にある言葉を発していた。

「もしかして……王……様……？」

ルイズが驚いたように目を見開いて、僕を見ている。
自分でもなぜそう思ったのかわからない。

王様はさっき広間にいたじゃないか。

服装も違うし、時間的に考えても、さっき広間にいた王らしき人物がルイズだとは思えない。

それなのに、直感とでもいうのか、ルイズこそが『王』だ、という気がしてならなかった。

しばらくの沈黙。

僕が変なことを言ったので、怒ったのかもしれない。
僕は、不安になってきた。

しかしルイズは、なんとも気の抜けるような明るい声で言った。
「あら？ どうしてばれちゃったのかしら？」

手を顔に当てながら、いたずらっぽく笑っている。

ええええ！？

そ、それって、どういう……。

すると、彼女はくすくす笑いながら、

「広間にいたのは私のイトコよ。私たち、姿が似ているから、時々ああして代わってもらうの」

おいおい、王様がそれでいいのか……。

僕はすっかり気が抜けてしまった。

いいや。気が抜けている場合じゃないぞ。

ルイズが王様とわかれば、やるべきことは一つ。

僕は、意を決して聞いた。

「プネウマの鏡を見せてください……！」

つづく

第九話 プネウマの鏡

「プネウマの鏡を見せてください……！」

アイオリアの王を前にして、僕は頼んだ。

プネウマの鏡を壊せば、母さんを取り戻せる。今はただ、そことだけが、頭にあった。

「いいわ」

意外にも、アイオリアの王、ルイズは、こともなげに答えた。

しかし、気のせいだろうか……。彼女の表情が、少し曇った気がするのは。

心なしか、彼女の目が、僕を哀れんでいるように見えた。

ルイズに付き従って、王宮の廊下を進む。

いくつもの廊下と階段を通り、最上階の、最も奥にある部屋へと辿り着いた。

部屋の前には、二人の兵士が控えている。他の兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットを被り、腰に差した剣の他に、手には槍を持っている。

「陛下！ もうお戻りですか？」

「ええ、通してちょうだい」

兵士たちは初め僕をいぶかしんだが、やがて道を開けた。

植物の蔓が描かれた優美なデザインの扉が、兵士によって開かれる。

扉を開けると、中は体育館のように大きな部屋が広がっていた。王宮の正面と同じように、この部屋にも壁面や柱に植物の蔓が巻き付いている。

部屋の入り口から見て左側には大きなバルコニーがあり、春の陽

がさんさんと射し込んでいた。そして、右側には……。

聞かなくてもわかる。プネウマの鏡だ……。

二メートルほどもある大きな姿見。鏡の縁には奇妙な文様が彫り込まれている。

何かが映っているようだが、ここからではよく見えない。

「この鏡は、この世と魔界を隔てているのよ。この国にとってなくてはならない物なの」

ルイズが話し出した。

「だから……」

ルイズは僕の目を見て、静かに言った。

「誰かに壊されでもしたら、大変なことになるわ」

「……」

僕は、心臓が飛び上がるほど驚いた。

知っているのか……？　僕がこの鏡を割りにきたことを。

目の前が真っ暗になる。緊張と恐怖で息ができない。

バレていたんだ、始めから……。

さっきまでは美しいと思っていた彼女の姿が、恐ろしい魔物のように歪んで見えた。

「——丈夫？」

「え……？」

「大丈夫？　顔が真っ青よ」

気がつくと、ルイズは僕の肩に手を乗せ、心配そうに覗き込んでいた。

別段、怒ってはいない。どこか悲しそうに見えること以外は、さっきまでと変わらないようだった。

そ、そうだ、落ち着け。まだバレたとは限らないじゃないか。

改めてルーズの方を見ると、相変わらず綺麗な、優しい顔で、魔物なんかではなかった。

「もしも……もしもこの鏡が割れたら……どうなるんですか？」
怪しまれぬよう、慎重に尋ねる。自分でも声が震えているのが分かった。

「魔界が現世にまで広がり、今まで以上に魔物があふれかえるでしょうね。そして人間も動物も、魔物に食われてしまうでしょう」
そんな……。

僕は悩んだ。

そんな大事になるなんて。僕はただ、母さんを取り戻したいだけなのに……。

一瞬にして、記憶がさかのぼる。

閑静な住宅街に建てた、庭のついた、大きな家。

父さんだって、昔は優しかった。休日によく三人で出かけたものだ。

近所でも仲のいい家族として有名だった。

ある日、父さんは怪我をして、仕事を失い、その日から生活は一変した。

僕らは安いアパートに引っ越し、母さんも仕事を始めた。

それでも、三人が一緒なら、僕も母さんも満足だった。

しかし父さんは違ったようだ。

職を探そうとせず、酒ばかり飲み、毎日、夜の街を遊び歩いた。母さんと喧嘩が絶えなくなり、暴力をふるうようになった。

母さんは毎日帰るはずもない父さんの晩ご飯を作っては、泣きな

がら捨てていた。

もう、母さんにそんな思いはさせたくないんだ。
母さんはばかだから、優しすぎるから。
僕が守らなきゃいけないんだ……。

不思議なことに、ルーズは黙ったままの僕を——どこか悲しそうな表情で——ずっと見守っていた。

ここは僕の住んでいる場所とは違う世界だ。何が起きたって、僕には関係ない。

そうだ。

大変なことになる前に逃げればいいんだ……！

ついに、僕は決心を固めた。

その時、ルーズが再び『大丈夫？』と聞きながら僕に近づいてきた。

ドンッ！

僕は彼女を軽く突き飛ばし、目の前に置いてあった椅子に手をかけた。

そう、これで鏡を割るのだ。

プネウマの鏡に近づき、手に持った椅子を大きく振りかぶる。そうして、椅子を鏡に向けて放り投げた——。

——いや、放り投げようとした。

しかし、それはかなわなかった。

驚くべきことに、気がついてしまったからだ。

「僕が……映ってない！！ 周りの景色は映ってるのに僕だけ……」

どうして!？」

僕は叫んだ。

鏡に映っていたのは、椅子を振り上げた僕自身の姿ではなく、逆さまになった椅子が、不自然に浮かんでいる姿だったのだ。

肩に、そつと手が触れる。

鏡の中では、ルイーズの両手が、何もない空間に置かれていた。そして、そつとつぶやいた。

「この鏡はね、悪い心を持った人間は映らないのよ」

はつとして、振り返る。

ルイーズは、とても悲しそうな顔をしていた。

一気に、力が抜ける。

持っていた椅子を取り落とし、僕はへたり込んでしまった。

「ごめんなさい……ひよつとして僕……すごく自分勝手なことを…

…」

ようやく目が覚めた。

僕は、なんてひどいことをしようとしていたんだろう。

自分の身勝手な考えで、この世界を————シーアや、あの村の女の子や、ルイーズの住むこの国を————めちゃくちゃにしようとしていたんだ。

自分の浅はかさに、涙がこぼれた。

「思った通り……あなたは優しい人だね。一度は悪い心に負けてしまったけれど、他人を思いやる心はちゃんと持っている。ほら、もう一度鏡を見てごらんなさい」

ルイーズに言われて、恐る恐る鏡を見る。

まだ周りの景色に比べて、少し薄いけれど、今度はちゃんと、僕の姿が映っていた。

でも、『思った通り』って……？

ルイズが言った。

「試すようなことをしてごめんなさい。あなたがどんな人間か、知りましたの。ほんとね……」

ルイズは僕が落とした椅子を拾った。そして、なんと鏡に向かってそれを投げたのだ。

鏡が割れる！

衝撃に備えて目をつぶろうとした時、鏡から光のようなものが出て、大きな音と共に、椅子を弾き返した。

僕は、慌てて鏡の表面を触る。当然ながら、傷一つ付いていない。「プネウマの鏡はそう簡単には壊れないわ」

彼女はそう言っと、振り向いて、微笑んだ。

「申し訳ないけど、プネウマの鏡を壊せば願いが叶うというのは嘘よ」

僕は、はっとしてルイズを見た。

どうしてルイズがそのことを……。

ルイズが軽く手を上げると、先ほどと同じようにデュークが飛んできて、彼女の手にとまった。そして彼女はデュークを肩に乗せると、おもむろにことの真相を語り始めた。

その時のルイズは、今までのようなやんわりとした雰囲気ではなかった。意志の強そうなその表情は、まさに女王と呼ぶべき威厳に満ちたものであった。

「私は、アイオロスにあなたを連れてくるよう頼んだの。そして、私はあなたを試した。今のところ、合格と言えるわ」

「どうしてそんなことを……」

ルイズは、大きく息を吸うと、僕の目を見て、静かに、ゆっくりと言った。

「あなたが、この国の新しい王だからよ」

僕の新しい運命が、今、始まろうとしていた……。

つづく

第十話 闇よりの使者 part 1

「え……？」

アイオリアの王、ルイズが語ったのは、信じられない言葉だった。

僕が『この国の新しい王』……？

「それってどういう……」

こと、と言いかけた時、ふいにカタカタと物音が聞こえ始めた。机の上にのせられていた花瓶が、音を立てて震えていたのだ。

「！？」

ガシャアアーン！！

ついに、花瓶は机から滑り落ち、割れてしまった。

途端、空気が淀む。妙な圧迫感で、息が詰まりそうだ。

ルイズの表情から、緊張が見てとれる。何か、禍々しい事態が起こっているのだということは、僕にもわかった。

突然、バルコニーからものすごい風が吹き付けた。

思わず目を閉じる。

風がおさまったところで、薄目でバルコニーの方を確認すると、どこから入ったのか、黒いローブを着た男が立っていた。

その男を見た瞬間、僕は恐怖で凍りついた。

目はフードで隠されているが、まるで生気のない顔。ローブから覗いた手は、妙に青白く、不自然に節くれだっていた。

「面白いものを見させてもらったよ」

男が口を開いた。耳に残る、ざらついた不快な声。

ルイズは男を見るなり、顔をこわばらせ、叫んだ。

「バイバルス……！！」

バイバルスと呼ばれたその男は、神経を逆撫するように、ククと笑った。

「覚えていて下さって光栄です、陛下」

わざとらしくお辞儀をする。

会話の様子から、ルーズと男は面識があるようだった。それが決して好意的な関係でないことは、一目瞭然だ。

「近頃、魔物に町や村を襲わせているのはお前ね、バイバルス！
一体何が目的なの！？」

男は、なおもからかうように笑い続ける。

「あのお方がもっと多くの魂を集めよ、と仰るのでね……」
ルーズの美しい顔が、怒りで歪む。

「ここはお前のような者が来る場所ではないわ！ 早々に立ち去りなさい！」

ルーズは、大きく右手を振りかざした。すると驚くべきことに、何もない手の中から、巨大な炎が放たれた。

「魔法！？」

僕は叫んだ。

そうだ！ これこそが、シアが言っていた『魔法』に違いない。
文字通り、ルーズは何もない空間から炎を生み出したのだ。
放たれた炎は、ローブの男めがけて一直線に飛んでいった。

しかし、男は全く動じる気配がない。

そして、炎が男を包み込もうとしたまさにその時……！

ガキイイイン！！

まるで、男の周りに見えない壁があるかのような。炎はバリアのようなものに弾かれ、あとかたもなく消えてしまった。

男は火傷一つ負っていない。

この状況を楽しんでいるのか？ 不気味な笑みを浮かべながら、言った。

「いやいや、相変わらず貴女の魔力は素晴らしい。だが……」

男はどこからともなく杖を取り出した。本の中の魔法使いが持っているような、先の曲がった木の杖だ。

「今の私にはかなわんよ!!」

叫ぶと同時に、男は杖から炎を放った。

何もない空間から炎を生み出したのはルイズと同じだが、男の場合、その炎の規模がまるで違っていた。それは、あの村を焼いたドラゴンの炎に匹敵するほどだ。

僕が立ちつくしていると、ルイズは僕を突き飛ばした。そして、僕をかばうようにして、その炎をもろに受けてしまった。

「キヤアアアアア!!」

恐ろしい悲鳴。

思わず目を閉じた僕は、その姿を見ることができなかった。

しばらくして、炎がおさまった。

通常の炎なら、こんな短時間に炎が勝手におさまるということはないんだろうけど。きっと魔法の炎だからだろう。炎は次第に弱まり、部屋には煙だけが残った。

「王様!!」

なんと、ルイズは無事だった。服は無残に焼け焦げているが、肌には煤が付いているだけで、火傷は一切していなかった。

僕は、倒れているルイズに駆け寄った。

よかった。意識はあるようだ。

「直前にバリアを張ったのか。やはりなかなかあなどれん。しかし、その美しい顔に傷がつかなくてよかったよ」

他人事のように話す男。僕は心の底から怒りがわいてきた。

事情は知らないけれど、この目の前にいる男が、とんでもない悪党であることだけは間違いなかった。

僕は怒りのままに、男に向かって叫んだ。

「お前何者だよ!?! どうして王様にこんなひどいことを!! 許

さないぞー!」

男は全く動じることもなく、むしろ興味深げに僕をまじまじと見た。

「ほう……面白い。お前が新しい王だな？　しかもその服装……異世界のものだな」

「!？」

僕は動揺した。

普通、『異世界』などという概念を、容易に理解できる人間がいるだろうか？　実際に『異世界』と思われる場所へ来てしまった僕でさえ、信じられないのに。

しかし、この男はいとも簡単に僕が違う世界から来たことを見破ったのだ。

その時、倒れていたルーズが、僕の名前を呼んだ。

「……げて」

「え？」

「逃げて……!」

ルーズの悲痛な叫び。

僕は叱りつけるように、言った

「逃げません！　王様を置いていけるわけないでしょう!？」

この女性ひとが僕にとって敵なのか、味方なのか、まだわからない。

ひとを勝手に試したり、違う世界に連れてきたり。ひどいと思う。

それでも今は、この女性ひとを守らなければいけない。

なぜだかわからないけど、僕は、そう思った。

un

第十一話 闇よりの使者 part 2 (前書き)

更新が遅くなつてしまいました。

すみません。 m (——) m

第十一話 闇よりの使者 part 2

男はすでに、次の攻撃に取りかかっていた。

「誰が王になろうと同じ事……私の邪魔はせん!!」

男から、無数の黒い糸のようなものが飛び出した。

その糸はルーズをしばりあげると、彼女を高々と持ち上げた。

巻きついた糸が、彼女の腕や胸を痛々しく締め付けている。

僕はルーズを助けようと、走りだした。

しかし、一瞬ふわりと浮きあがる感覚がしたと思うと、みるみる床が遠ざかっていった。

「うわあああ!？」

いつの間にか僕の足にも糸が巻きついてたようだ。右足に巻きついた糸で持ち上げられ、僕は、逆さまの状態で、宙づりになってしまった。

当然、全体重を支えることになってしまった右足。足の付け根が、引き裂かれそうなほど痛んだ。

「何するんだよ!! 放せよ!!」

男は全く見向きもしない。

「バイバルス、エンノイアを放しなさい! その子は関係ないはずよ!」

「さてね。それはどうかな。この少年はいずれ王になるのであるろう?」

男の声のトーンが変わった。

「ならば……今のうちに始末しておいた方が都合がいい」

「うあ……っ!!」

男が言つと同時に、巻きついた糸が足に食い込んだ。強烈な痛みが走る。

まずい。このままじゃ、本当に殺される……!!

母さんの顔が浮かんた。

お願いだ。せめて、もう一度だけ、母さんに会いたい。
だから、それまでは死にたくないんだ……！

「ピピッ！」

デュークが、心配そうに僕を見ていた。

しかし、残念なことに、鳥であるデュークにはどうすることもできないようだ。

「ごめん……。僕、もうだめかもしれない……」

僕は、デュークに言った。

コッソ。

デュークは、クチバシで僕のズボンのベルトをつついた。

コッソコッソコッソ。

注意を引くように、何度もつつき続ける。

「何だよデューク。ベルトがどうかして……」

僕ははっとした。

そうだ！ シーアにもらった短剣！

王宮へ入る前。シーアは、丸腰では不便だろうということで、僕に短剣をくれた。

その短剣を僕は、ズボンのベルトに挟んでいたのだ。

僕は、男を見た。

ルイズと何か会話しているようで、今は僕の方を見ていない。

僕は気付かれないように、慎重に手を伸ばした。

逆さまの状態で腰に手を伸ばすというのは、かなり根気のいる作業だったが、ようやくベルトに挟んだ短剣に手が届いた。

そっとその短剣を鞘から抜き取る。

剣を持つことなど、初めてだ。

抜き取った瞬間、手にずしりと重みが伝わった。

僕は初め、その短剣で糸を切ろうと思った。

しかし、この姿勢で足に巻きついた糸を切るというのは、到底無理な話であった。

そこで僕がとった行動は……。

男に向かって、その短剣を勢いよく投げることだ。

ヒュンッ！

ドラゴンを射るのには失敗した僕だったが、今度は上手くいった。短剣は風を斬りながら、真っ直ぐに男の方へと飛んでいった。

男は慌てて振り向くと、先ほどと同じようなバリアを張った。

そしてそのバリアに、短剣ははじき返されてしまった。

しかし成果はあった。

突然のことに、男はひどく動揺したようだ。

そのせいなのか、一瞬僕に巻きついていった糸が緩んだのだ。

僕は足を振りまわし糸から抜け出した。

「しまった！」

男が叫ぶ。

高いところまで持ち上げられていたので、糸から抜け出した瞬間、床に激しくたたきつけられた。

しかし、痛がっている場合ではない。僕はすぐさま入り口のドアへと駆けた。

ドアに手をかけたところで、ふと思案し、僕は男とルイズのいる方へ振り返った。

「王様ー！！ 必ず助けるからねー！！」

僕はルイズに向かって叫んだ。

見捨てるんじゃない。見捨てるんじゃないんだ。

「ただ今この僕は、ここにいても、どうすることもできない。
だから……どうする？
どうすればいい！？」

「エンノイアー！！」

その時、ルイーズが僕の名前を呼んだ。

「エンノイアー！ リュクルゴス隊長を呼んで！」

「え！？」

リュクルゴス隊長って誰……！？

「広間にいるはずよ！ お願い……リュクルゴスを……リュクルゴス隊長を呼んで！！」

「わ、わかった！」

それが誰なのか、その人を呼んだらどうなるのか、わからなかったが、とにかく僕は部屋の外へと走った。

「ほう。その隊長とやらが来るまで待っていてやろうではないか」
男は不敵に笑った。

「……後悔するわよ」

それに対抗するように、ルイーズは強気な笑みを浮かべた。

つづく

第十二話 リュクルゴス隊長（前書き）

更新がかなり遅れてしまいました。しかも今回はちょっと短いです。
（・・・・・）

これからこまめに更新できたらなーと思いますが……頑張ります。

第十二話 リュクルゴス隊長

「リュクルゴス隊長！！ 助けてください！！ リュクルゴス隊長
ーっ！！」

声の限りを尽くして、僕は広間の入り口で名前を呼んだ。広間に
いる人々が、驚いて振り返る。

「リュクルゴス隊長ーっ！！」

ローブの男から辛くも逃げ出した僕は、「リュクルゴス隊長」を
呼ぶために、この大広間へと戻ってきた。幸い邪魔をされるような
ことはなかったが、広間を目指し走る僕が目にしたのは、恐ろしい
光景だった。

見張りの兵たちが、扉の前で見ても無残な状態で死んでいたのだ。
骨が折れているのか、不自然な格好でぐったりしていた。

おそらくあの男がやったのだろう。よく見ると、死んだ兵士たち
の体には先ほどの黒い糸が巻き付いていた。

僕は、悪寒がした。

こんな騒ぎになっているというのに、兵が誰も駆けつけないとい
うのは、どおりでおかしいと思った。

早くしなければ、ルーズが危ない……！

「リュクルゴス隊長ーっ！！」

もう何度目になるかわからない。さすがに声がかすれてきた。と、
その時……。

「どうしたボウズ!?」

突然、肩に手が置かれた。声の主を見上げると、黒髪の、がっしりとした男であつた。長いマントを羽織り、腰には剣を差している。そうか! この人が……!

「リukulゴス隊長!？」

「自分がそうだが……」

「王様が大変なんです! ロープの男が現れて……!」

男の言葉を待たず、僕はルイーズの窮地を必死に伝えた。

リukulゴス隊長はひとつうなずくと、すぐさま数人の兵士を引き連れ、ルイーズのいる部屋へと向かった。僕も慌ててついて行く。

リukulゴス隊長と兵士たち、そして僕は、バタバタとルイーズのいる部屋へと入った。扉は僕が隊長を呼びに行く時に開けたままになっていた。

「陛下ーッ!」

「王様ーッ!」

糸に縛られ、不自然に空中に浮かんだルイーズ。首をもたげてぐったりしていた。

ま、まさか……。

僕や兵士たちも、最悪の事態を考えた。

「大丈夫……。気絶しているだけだよ」

僕たちの考えを見透かしたかのように、ロープの男は言った。

その言葉が余計に癪に障ったようで、リukulゴス隊長は顔を真っ赤にして男を睨んだ。

「貴様ッ! 陛下を離せ!」

「残念ながらそういうわけにはいかんね。力づくで取り戻したらどうだね?」

リukulゴス隊長はスラリと腰の剣を抜くと、真っ正面から男に向かつていった。

「正面から攻撃するなどバカなことを!」

男から黒い糸が放たれた。

糸が隊長に巻き付こうとしたその時、隊長は大きく剣を振りかぶった。

そしてなんとその剣で糸を叩き切ったのだ！

そのまま勢いよくローブの男を斬る。剣は男の腹をえぐり、刃の先に鮮血が舞った。

「く……くそ……」

男はよろけながら、膝をついた。

ルーズがこの人を呼べと言った理由がわかった。

強い！

僕は、初めて見る本物の剣技に、興奮していた。

つづく

第十二話 リュクルゴス隊長（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
感想等いただけるとうれしいです。

第十三話 恋人

「あつ！ 落ちる！」

ローブの男がひるんだため、ルイズを縛り、宙に持ち上げていた糸が緩んだ。当然、ルイズの体は重力に従って落下し始めた。僕の声を聞くやいなや、リukulゴス隊長は剣をしまうと、素早く体の向きを変え、落下してくるルイズをしっかりと抱き止めた。

おおおお！

思わず歓声をあげた僕。

つられて、待機していた兵士たちまでが歓声をあげた。拍手なんかしちゃってるし。

「感心している場合か！ さっさとアイツを縛り上げる！」
クスッ。怒られてる怒られてる。

隊長に怒鳴られて、兵士たちはワタワタと、傷を負って倒れているローブの男を縛りにかかった。

「う……」

その時、隊長に抱き抱えられていたルイズが目を覚ました。

「陛下！ ご無事ですか！？」

「リukulゴス！？」

ルイズは、はっとして隊長を見た。

「あなたが助けてくれたのね、リukulゴス……ありがとう」

あ、あれ？ 気のせいかな。ルイズの頬がほんのり赤く染まったよう……。

すると、リukulゴス隊長は心底申し訳なさそうな表情で言った。
「いえ……。申し訳ありません、気づくのが遅すぎました。そのせいで陛下を危険な目に……」

ルリーズは慌てて首を振った。

「いいえ！　こうして助けてくれただけで充分よ。よくぞ来てくれました」

リユクルゴス隊長はくしゃっと笑った。

「そりゃ、貴女のためなら地の果てだって助けに行きますよ」

「リユクルゴス……」

ルリーズの頬が一層赤くなったように見えた。

リユクルゴス隊長はルリーズを優しく下ろすと、先ほどの炎のせいで服が焦げ、白い肌があらわになってしまったルリーズに、慣れた様子で自分のマントを着せてあげた。

隊長を見つめるルリーズの目は、母さんがロバートを見る時のそれに、よく似ていた。

なんだ、そういうことか……。

僕は、わかってしまった。そう、この二人は……。

そう思った途端、さっきまで興奮していたのが、なんだかモヤツとした気持ちになった。

それから、胸がチクチクしてきた。

所在なくて、二人の側を離れようとした時、ルリーズに声をかけられた。

「ありがとうエンノイア」

「そんな。僕は何もしてないです」

「何もだなんて。あなたは私を見捨てなかった。そして、リユクルゴス……隊長を呼びに行ってくれた。すべてあなたのおかげよ」

僕は首を振った。

「いえ、そんなの全然大したことじゃありません。僕は……その……隊長さんみたいに強くないし……」

「え？」

ルイズはなぜそこで隊長が出てくるのかわからないといった感じで、小首を傾げた。突然引き合いに出されて、隊長も驚いているようだった。

ああああ……僕は何を言ってるんだろう。

なんだか恥ずかしくなつて、僕はそそくさとその場を離れた。

リユクルゴス隊長はルイズをかばうようにして立つと、兵士によつて縛られたローブの男に再び剣を突きつけた。

「貴様、何者だ？ 陛下を傷つけた罪、万死に値するぞ！」
隊長は毅然として言い放った。

こんな状況になつても、ローブの男はククク……と笑っている。血が出ているというのに、痛がる様子もない。

「何がおかしい！」

すると、ローブの男が言った。

「私が何者か……。王様の方がよくご存知なのでは？」
そこにいた人々が一齐にルイズを見る。

ルイズは厳しい顔でうなずき、説明を始めた。

つづく

第十三話 恋人（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

第十四話 闇に蠢く者

「この男はイスマイル・バイバルス。……かつてこの国の政治家だった男よ」

ルイズは、このローブの男について説明を始めた。その内容を要約するところだ。

ルイズとこの男はかつて大学の同級生だった。二人は友人で、毎日、理想の国のあり方について語り合っていた。そして同じ理想を持って、この王宮へ入った。

しかし……ルイズとバイバルスの考えは次第に食い違っていた。ルイズは他民族との調和を望み、国内の安定を目指したのに対し、バイバルスはテラスティア——昔このアイオリアを含む広大な大地を支配していたという王国（シアアが話していた）——の再建、すなわち国土拡大を望んでいた。

当然ルイズはその考えを断固拒否した。しかし自分の望みがかなわないと知るや、バイバルスは不穏な動きを見せるようになった。今度は魔界に傾倒し、国内で禁止されている怪しげな魔術に凝るようになったのだ。

それでルイズはバイバルスを国から追放した……。

それが、この男とルイズとの因縁だ。

ちなみにリukulgos隊長はそのころ王宮にはいなかったのので、バイバルスとは面識がないらしい。

「それで、陛下を襲った目的は何なのだ？ 追放された復讐か？」
リukulgos隊長が、剣を突きつけたまま、目の前のローブの男・バイバルスに聞いた。

バイバルスは急に笑うのをやめ、ぞつとするような低い声で答えた。

「貴様らには理解できん。崇高な目的のためだ」

隊長とルーズは何かを話し始めた。

僕はそろそろ退屈し始め、辺りをうろうろしていた。と、ふと縛られているバイバルスの手元を見ると、ロープの袖に何か光る物が見えた。

何だ……？ 金属みたいな……。いや、短剣だ！

僕がさっき投げた短剣を、コイツはこっそり袖に忍ばせていたのだ。

「隊長さ……」

隊長にそのことを伝えようとしたが、時遅し。隊長が振り返った時、バイバルスは器用にもすでにその短剣で手首のロープを切っていた。そしてすぐさまその短剣を持つと、ルーズに向かっていった。

「キャアア！」

一瞬の隙を突かれた。強盗なんかがよくやるように、バイバルスはルーズの喉元に短剣を突き付け、彼女を人質に取った。

「誰も動くな！ 動けば王の命はないぞ！」

「クッ……」

隊長含め、誰一人動くことができなかった。

バイバルスはルーズを連れたままバルコニーに出た。そしてバルコニーの手すりに上ると……そのまま飛び降りてしまった！
「なっ！？」

兵士たちが一斉にバルコニーに駆け寄る。僕も慌ててバルコニーに出た。

ここは三階だ。ルイズを抱えたままで、普通に着地するというのは難しいだろうが！？

下を見下ろそうとしたちょうどその時、彼方から耳慣れた羽音が聞こえた。

ワイバーン！

都に来る途中に戦ったあのドラゴンと同じ外見をした魔物が、こちら目がけて飛んできた。そして素早くバイバルスとルイズを背中に拾い上げると、再び彼方へと飛び去ってしまった。

そう、ルイズは連れ去られてしまったのだ。

つづく

第十四話 闇に蠢く者（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回少し説明口調になりすぎたかもしれません。

これから、少し物語の雰囲気が変わります。主人公が、次第に王国の運命に巻き込まれていく予定です。

第十五話 救出作戦

ルイズがさらわれた後、僕たちは広間へと戻った。僕は広間の隅にある椅子に腰かけながら、考えていた。

僕をこの世界に連れてきたのは、ルイズであった。そして、ルイズは連れ去られてしまった。かつてルイズの友人だったという男、イスマイル・バイバルスによって。

あの瞬間、僕は目の前で一国の王が誘拐されたということに気が動転していて、それについて深くは考えていなかった。しかしこうして落ち着いてみて、初めて事態の深刻さがわかった。

——僕は、元の世界に帰れなくなったのだ。

ルイズがいない今、なぜ僕がこの世界に連れて来られたのか、その理由を知る術もなかった。

そして、僕はこれからどうすればいいのだろうか？

生きていかなければならないのか？ この見知らぬ世界で？ 魔物や凶暴なモンスターに満ち溢れた、この世界で？ 母さんとも二度と会えないまま……。

知らず涙が零れた。

突然すぎる。あまりに突然すぎるよ……。

「大丈夫か？」

もたげていた頭にコッソ、とコップを当てられた。見上げると、そこにはリユクルゴス隊長が立っていた。彼は手に持った飲み物を僕に差し出し、心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

「陛下のこと、知らせてくれてありがとな。怖かったろう」

そう言って、隊長は僕の頭に軽く手を置いた。わっと泣き出しそうになるのを、僕は必死でこらえた。

ルイーズがさらわれた時、一番動揺していたのはリュクルゴス隊長だった。がつくりと膝をつき、自分自身の愚かさを罵っていた。それが今では冷静さを取り戻し、僕を氣遣ってくれている。

「すみません……。あの短剣を投げたのは僕なんです」

そう。僕がルイーズがさらわれる原因を作ったのだ。あの時、短剣を拾ってさえいれば……。

「いいや、それはお前のせいじゃない。ちゃんとそういうことを確認しなかった俺や、兵士たちの責任だ」

リュクルゴス隊長は氣を取り直すように、笑って言った。

「そういえば自己紹介がまだだったな。もう知っているかもしれないが、俺はリュクルゴス・ヘイロウタイ。こう見えても討伐隊の隊長だ」

リュクルゴス隊長は、黒の長い髪を後ろで一つに束ね、額にはバシダナを巻いている。いかにも軍人らしく、がっしりとした体には、皮でできた鎧を装備していた。歳は三十前後といったところだろう。「僕はエンノイア・グノーヴァーです」

よろしく、と言いかけた時、広間で歓声が上がった。

見ると、広間で兵士たちが一様に整列していた。兵士たちの前には、中年の軍人が立ち、その男が「陛下を救出するぞ!」と一声叫ぶと、兵士たちが一斉に賛同の声を上げた。

僕は驚いてリュクルゴス隊長に尋ねた。

「助けに行くんですか!? 王様を!？」

「ああ、勿論だ。陛下は恐らく魔界に連れて行かれたのだと思うが、助けられる可能性がなくなっただけではない。すでに執政官から救出の命令が出ているしな」

そうか! その選択肢があっただんだ! 僕は、まだルイーズを救

えるかもしれない、ということをし、すっかり失念していた。

「じゃあ、俺はそろそろ行かなきゃならん。エンノイア、大丈夫か？　一人で帰れるか？」

「大丈夫です！　ありがとうございました、リユクルゴス隊長！」
僕が元氣を取り戻したことに安堵したリユクルゴス隊長は、整列している兵士たちの前に歩み出た。

「諸君。我らはこれより国王代理、執政官閣下の命によりて、国王陛下救出の任に就く。敵は魔界に通ずる非道の魔術師、イスマイル・バイバルス。だが同志たちよ、恐れることはない。我らアイオリア軍が力を合わせれば、恐れるものなど何もない。各々、心してかかるがよい……！」

そう言つと、リユクルゴス隊長は自らの剣を掲げた。兵士たちも同様に剣を掲げ、鬨とぎの声をあげた。

広間の窓から差し込む光を受けて、無数に掲げられた兵士たちの剣が、きらきらと輝いていた。

つづく

第十五話 救出作戦（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
感想等、いただけたら嬉しいです。

第十六話 アイオロス（前書き）

ちょっと短めになってしまいました。

第十六話 アイオロス

「デューク」

椅子から立ち上がった僕の側に、デュークがおずおずと近づいてきた。

僕はデュークの目を見て、静かに言った。

「いや……アイオロスと呼ぶべきかな？」

『アイオロス』と呼ばれて、デュークはたじろいだ。

もう、僕には分かっていた。こいつはただの鳥じゃない。

こいつの名前はアイオロス。ルイズのペットだか何だか知らないけど、こいつが僕をこの世界に連れてきた張本人（鳥？）だ。

こいつはルイズに頼まれて、僕をこの世界へと導き、時には手助けし、時には僕の力を試しながら、僕をルイズと引き会わせた。今まで聞こえていた声は、こいつの声だったんだ。でもそれは、心に語りかけるような感じで、直接話せるわけじゃない。こちらから声を聞こうとすることも無理だ。

「そうだろ？」

そう聞いても、デュークはいかにも鳥らしく、小首を傾げただけだった。

この世界に連れてきてしまった責任を感じてか、それとも正体がばれたせいかわからない、今のデュークはどこか僕におびえているようだ。

元の世界に帰れなくなって、悲しいし、悔しい。さっきまでの僕なら、デュークを罵って、ひつつかんで、投げ飛ばしていただろう。でも、ルイズが助けられるかもしれないとわかって、僕の心は少し変わっていた。

僕はデュークに言った。

「一緒に行こうよデューク。もう怒ったりしないからさ」

ピイツ！

デュークは嬉しそうに一声鳴き、僕の肩にとまった。

「で……これからもデュークって呼んでいい？」

デュークは頷くように、うんうんと首を振った。

ふふ。可愛いやつ。

そうして、僕はデュークと共に王宮を後にした。

リュクルゴス隊長率いるアイオリアの兵士たちは今しがたルイズの救出に向かった。

え？ 僕はどうするかって？

勿論黙ってルイズが救出されるのを待つわけじゃないよ。

街の外に出ると、そこにはまだリュクルゴス隊長たちがいた。長旅になるのだろう、たくさんの荷馬車も用意してある。

——僕は気付かれないように、そっとその一つに乗り込んだ。

「よし！！ しゅっぱーっ！！」

掛け声とともに、馬車が走り出した。

ハアアア。今日は本当にいろいろなことがあった。

草の上を走る車輪の振動を感じながら、僕は荷馬車に積まれた木箱にもたれて、心地よい眠りに落ちていった。

u u u

第十六話 アイオロス（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
次話から第三章に入る予定です。

第十七話 二人の隊長（前書き）

今回ちょっと文章が狂ってるかもしれません。（＜―＞）

第十七話 二人の隊長

ガタゴトガタゴト……。ガタンッ！

「！？」

突然の衝撃に驚いて、僕は目を覚ました。

馬車が止まったようだ。外から、声が聞こえてきた。

「よし！今日はここで夜営だ！」

僕は今、荷馬車の幌の中にいる。ルイズの救出についていくため、こっそり乗り込んだのだ。

もちろん肩の上にはデューク。

「ピー！」

「しっ。静かに。見つかつちゃうよ」

グウウウウ。

おっと……。デュークには静かにしろと言いながら、僕のお腹は静かではなかった。

「お腹空いたなあ……」

兵たちの晩御飯を用意しているのだろう。どこからか良い香りが漂ってきた。

僕はふと、寄りかかっていた木箱を見た。元からこの馬車に積まれていたものだ。

食べ物でも入ってないかな……。

そう思って木箱の蓋を開けると、残念ながら中に入っていたのは食べ物ではなかった。しかしその中身は、僕にとって空腹を忘れるほど魅力的な物であった。

「剣だ……」

木箱の中には、たくさんの剣が詰められていた。

僕はその一つを手にとってみた。

長さは一メートル弱。ごく一般的な兵が持つような、実に質素なものだが、それでも僕は大喜び。シアには短剣を貰ったけど、こんなちゃんとした剣を握るのは初めてだ。

僕はすっかりその剣に見とれていた。だから、馬車の幌をめくる人の気配に全く気がつかなかった。

「おい子供！　そこで何をしている！」

「だから違うって言うてるだろ！！」

勝手に荷馬車に乗り込んでいたのを見つかってしまった僕。なんと、剣を握っているところを見られてしまったせいで、あらぬ誤解を受けてしまった。

「いいか、もう一度だけ聞くぞ。なぜ我が軍の武器を盗もうとした！？」

盗むだなんてとんでもない！　ただ食べ物を探していたら、箱の中に剣が入っていたから手に取ってみただけなのに。

王宮にいた兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットをかぶった男が二人。さっきから僕が剣を盗もうとしたと決めつけて、全く聞く耳を持たない。

「何事だ？」

男たちの後ろから、上官らしき人物が声をかけた。顔はよく見えない。

「はっ。この少年が荷馬車に積んであった武器を盗もうとしておりまして……」

「だから違うってば！」

「どれどれ？」

その上官らしき人物がひよいと顔を覗かせた。

あ、あ、あ！ リュクルゴス隊長だ！

向こうもこっちに気づいたらしい。目をまん丸にして驚いている。一度顔を会わせているため、なんとも気まずい雰囲気になってしまった。

しかし、驚くべきはここからだった。リュクルゴス隊長はオホン、と咳払いをすると、

「あゝ……すまん。こいつは俺が雇ったんだ。剣の数を確認してもらってんだ」

兵士たちにそう言った。

「そ、そうでありましたか。し、しかしこんな子供をお雇いになられたので？」

「子供にだって雑用くらいできるだろ。なあ？」

そう言ってリュクルゴス隊長は僕に目配せした。

「は、はい」

僕はうなずいた。

と、とりあえず助けてくれた……のかな？

「何事ですか」

すると、もう一人、上官らしき男が現れた。

さつき広間で兵士たちの前に立っていた中年の男だ。おそらくリュクルゴス隊長よりは少し年上、髪には少し白髪が混じっていて、くるりとカールしたひげを生やしている。

その男は、リュクルゴス隊長を見るなり、大げさに驚いてみせ、すっとんきょうな声をあげた。

「おお！ これはこれは、リュクルゴス隊長ではありませんか。うちの兵たちに何か御用ですか？」

リュクルゴス隊長は、男に冷たい視線を投げかけた。

「別に。お宅の兵が私の雇った少年をいじめていたので、助けてい

たところですよ。では」

どこことなく棘のある言い方だ。中年の男は、僕を連れて立ち去ろうとするリュクルゴス隊長に、すかさず声をかけた。

「おお、そういえばリュクルゴス隊長！ 話によれば、陛下が敵に捕らえられた時、陛下は名指しであなたに助けを求めたそうですね。広間にいた者があなたの名を叫ぶ少年を見たと言っていましたよ」

リュクルゴス隊長の動きが止まった。ゆっくりと男の方に向き直る。

「……それがどうしましたか？」

男はフハハ、と笑うと、嫌味たらしく自分のひげを撫でた。

「不思議ですなあ。王宮警備を担当している『衛兵隊』の隊長である私でなく、わざわざ『討伐隊』隊長であるあなたを呼ぶとは……」

やや間があつて。

「何か”特別な理由”でもあつたんでしょうか」

男は『特別な理由』という部分を妙に強調して言った。

リュクルゴス隊長は一瞬沈黙したが、やがて肩をすくめて言った。
「それは……あなたが頼りにならないからじゃないですか？ 俺に皮肉を言うために、わざわざ仕事をほっぽり出してくるような男は、そりゃ信用ならんでしょ」

男の顔がみるみる真っ赤になってきた。

リュクルゴス隊長は高らかに笑って、今度こそ僕を連れてその場を離れた。振り返って見ると、男は口汚く罵りながら、兵たちにあたり散らしていた。

な、何なんだ一体……。なんだか知らないけど、険悪な雰囲気。それに、僕はこれからどうなっちゃうんだろ？

つ
つ
く

第十七話 二人の隊長（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

これからは毎日更新……とか思いましたが、さすがに昨日は間に合いませんでした。（^^^^

感想等いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070v/>

aiolos

2011年11月21日16時30分発行